歴史遺産

赤レンガ倉庫を賃貸へ

市が公募で業者選定、地域発展につながるか

大阪港の発展を大正期から支えてきた赤レンガ倉庫（海岸通）は耐震性の問題で長らく閉鎖されていましたが、所有者である大阪市がこのほど、民間に賃貸し、飲食や物販などの集客施設として再利用する方針を固めたことが分かりました。昨年度に決まった大阪府市の観光戦略で、築港地区を「世界第一級の文化観光拠点となる重点エリア」と位置付けたことに基づくもの。この間の経緯を振り返ると共に、地元住民の声を訊きました。

「保存と再活用」に期待、過度の「観光化」などに不安も

◆物流倉庫として活躍

赤レンガ倉庫は一九一三（大正十二）年に株式会社住友倉庫が物流施設として建設。アジアから輸入され、大阪港で陸揚げされた綿花などを積んだ貨車が構内の線路（臨港鉄道）を走り抜け、大変な活気を呈（てい）したといわれています。

第二次大戦では米軍による再三の空襲を潜（くぐ）り抜け、戦後は高潮対策に伴う地上げで二㍍も地下に埋まった形になりながらも物流倉庫としての機能を果たし続けてきました。

しかし一九七〇年代に入って物流の主力がコンテナ輸送に移ると、次第にその役割を弱め、

一九九九年には物流倉庫としての廃止が決まると同時に、大阪市が約六億円で購入、住友倉庫から市へ管理が移りました。

二〇〇二年度からは、その大正ロマン溢れる四棟の佇(たたず)まいを生かし、若手芸術家らの創作活動の拠点として新たなスタートを切りました。が、二〇〇六年度に「耐震強度を満たしていない」ことが判明。耐震補強を施(ほどこ)しての再活用も考えられましたが、一棟当たり約一億円という多大な費用がネックとなり、現在まで立ち入り禁止となっています。

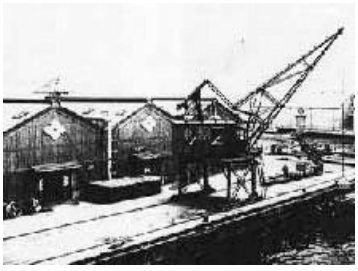
◆観光戦略で民間活力導入

こうした推移の中、平成二十四年度には大阪府・大阪市の観光戦略として「大阪都市魅力創造戦略」が策定され、その中で築港地区を「世界第一級の文化観光拠点となる重点エリア」と位置付けると共に、その具体化として、この倉庫を「民間活力の導入で集客観光施設として再利用しよう」との方針が示されました。

それを受けて大阪市は外部有識者を集めて「検討会議」を設置。事業者を公募する際の条件として、①事業性の確保②耐震性の確保③近代化遺産の保存継承―などが検討されてきました。そして、その提言を受けて、このほど「プロポーザル方式による公募」が決まったのです。

◆外壁保存・内観縮小など条件に

その実施要領によると、この十一月に応募を受け付け、年内には事業者を決定。選ばれた業者は建物(倉庫)を無償で取得でき、敷地(約九五六七㎡)は市と「定期借地契約」(期間は来年二月から二十年以上三十年以下、予定賃料は月額約一五七万円)を締結。建物利用に当たっては、①安全対策を施す②倉庫の一部外壁(がいへき)面を保存する③内観は現状の雰囲気を踏襲(とうしゅう)する―などの条件を守ることが求められています。



←活況を呈した戦前の住友倉庫㊤と、耐震性の問題から閉鎖されている今の赤レンガ倉庫㊦

こうした中、九月に開かれた現地見学会には活用に興味を示す九社が参加。管轄部署である市港湾局の担当者は「ハードルは高く、母体がしっかりした事業者でないと難しいでしょうが、一社でも築港の発展に貢献できる企業が現われれば、契約にこぎつけたい」(十月十七日付「大阪日日新聞」記事から)と意欲を示しています。

◆過度の観光化に不安、地域に責任も

では今回の事業者公募について、地元住民はどう受け止めているのでしょうか。

赤レンガ倉庫の近くで長年公衆浴場を営みながら、様々なイベントの会場に浴場を提供するなど築港地区の活性化に心を寄せてきた福田頼隆(よりたか)さん(七〇)は次のように話しています。

「近くで生まれ育った人間として『なんであんな古い建物をいつまでも残しておくのやろ?』と長年その値打ちを感じることはありませんでした。しかし十年ほど前から築港地域のまちづくり活動に参加するようになり、その中で外部の人たちからこの建物についての気持ちを聞かされたり、港湾局の案内で内部を見学させてもらったりするうちに段々とその歴史遺産

としての価値が分かるようになってきました。特に大阪市の街歩きイベントである『大阪あそ歩』の地元ガイドとして天保山やダイヤモンドポイントなどと共にこの倉庫を案内するようになって、『何としても残してほしい』『いい形で活用してほしい』との思いはいよいよ強くなり、その中で、保存・活用に力を合わせようという人たちも出てきました。その一方で、同じように赤レンガ倉庫を抱える全国のいくつかの地域では、観光ということを重視しすぎて歴史遺産としての本来の価値が見えなくなってしまっている例も知り、『そういう方向だけはとってほしくない』という懸念も生まれてきました。そんな中で今回、大阪市が民間企業にこの倉庫を賃貸し、集客施設として活用してもらおうというプランが出てきた訳ですが、正直複雑な思いがあります。といいますのは、このプランの背景には、市の財政難という大きな問題があり、耐震性の不足から閉鎖されて何の収益も生み出さないよりは、賃貸して少しでも収入を得ようというのはやむを得ない流れかとも思いますが、歴史遺産の保存・活用というような分野には、多少のお金や時間がかかっても、行政が責任を持ち、その上で市民と一体になってその方法を考え合うというのが本来の在り方だと考えるからです。個人的には、現在大型クルーズ船が立ち寄る天保山岸壁だけでなく、赤レンガ倉庫に近い旧住友岸壁を小型クルーズ船などが接岸できる程度にまで再整備し、乗船客が散策できるようになれば素晴らしい―などと思い描いていますが、そんな市民の声も反映させながら、商業ベースではなく、本当に地域の発展につながる保存・活用を行政が進めてほしかったのです。とはいえ一番の問題は、そんな声や動きが地元住民の間で弱かったこと、そのために行政もそういう声や動きをいわば〝錦の御旗〟にして、公的な保存・活用の方向を打ち出すことができなかったことだと思います。そして、方針が具体化された今、そうした今回の経験を、今後のまちづくりに生かしていくことこそ大切ではないかと考えます。ただ願わくば、倉庫の活用を託された業者が『外観は通常望見できる範囲の外壁面を保存する』『内観は現状の雰囲気を踏襲する』などの条件を忠実に守り、過度に観光化させることなく、節度ある事業を行なってもらえたらと思っています」

→「保存と再活用」への期待と共に、過度の「観光化」などに不安の声も聞かれる赤レンガ倉庫

◆保存・活用は歓迎も業者に不安

また、同じく赤レンガ倉庫の近くで長年和菓子店（製造・販売）を営み、築港地区のまちづくり活動にも関わってきた西谷人志さん（四

七）は次のように語っています。

「赤レンガ倉庫は近くにあるだけに〝灯台もと暗し〟というか、気にも留めませんでしたが、他の地域の人たちからの『ええ建物や』という評価を聴いたり、実際に内部を見学させてもらったりすることで、『ほんまに何とも言えんええ雰囲気や』『この雰囲気を壊さん形で保存・活用できんもんやろか』と思うようになりました。今回、大阪市が民間に賃貸し、耐震化しての保存や集客施設としての活用を図ると聴いて、保存と活用そのものには全く異議はないものの、公募で選ばれた企業が『外壁を保存する』『内面の雰囲気を壊さない』などの条件をきちんと守ってくれるのかどうか、歴史遺産としての価値を充分生かす形で活用してくれるのかどうか、不安もあります。本当は、こういうことは市が責任を持ってやってほしいのですが、耐震化にお金がかかるなど財政的な理由から『立ち入り禁止』以外にどうにも出来ないというのなら仕方がないでしょう。いずれにしても、この公募による民間への賃貸で、長年閉鎖されていた赤レンガ倉庫が活用され、そのことで『そんな値

←民間企業が月157万円で最長30年間賃借できる敷地（約9567㎡）㊤と、無償で取得できるが外壁の保存などが条件となる建物㊦

打ちのある建物があったんか』とこの地域に注目が集まるなら、たとえ店の集客などにはつながらなくても、それはそれでありがたいことだと思っています。個人的には、コンサートや演劇など、この素晴らしい建物の雰囲気に合った、文化的な利用の仕方がされたら嬉しいですね」

◇

以上見たように、今回の公募方針を巡って地元住民の間では、期待と共に複雑な思いもあるようです。それらを踏まえて本紙としては、港区が誇る歴史遺産の保存・活用を企業に委ねるという、今さらながらの安易な民間委託の方向には、やはり警鐘を発せざるを得ません。

「大切な事業をなぜ公の責任で進めないのか」「私的利益を追求せざるを得ない民間企業に任せて本当に地域のためになるのか」「結局は賃貸料収入による一時的な財政改善しか見ていないのではないか」と。また、専ら「外部有識者」の意見に従ったという地元住民軽視の姿勢、さらには賃貸方針を明らかにした翌月（つまり今月）には公募を終え、見学会などはそれにも先んじて済ませ、年内には事業者を決定するという余りに拙速な手法には、「市民協働とは名ばかりか」との思いさえ込み上げます。

確かに、福田さんの指摘にもあるように、本紙も含めて地元からの声や運動が弱かったことも事実です。が、その上でなお、港区の後世に禍根を残さないためにも、今からでも大阪市は公募方針を撤回し、「外部有識者」などではなく地元住民こそが中心メンバーとなった「検討会議」を発足させ、本当の意味での歴史遺産継承と地域発展に向けた論議を行政としてリードすべきではないでしょうか。

本紙コラム〈霜月篇〉

あさやけ

芸術の秋も深まり、「なぜ昔の映画は心に残り、今のはそうでないのか」なんて考えています。もちろん一概には言えませんが、例えば『ゼロの焦点』。新婚旅行後に失踪した夫の行方を追って新妻が北陸路を辿るうち、終戦直後に端を発する夫と女達の哀しい過去を知るという、ご存じ松本清張の傑作推理小説。六一年と〇九年に映画化され、前者は名匠・野村芳太郎監督で公家出身の女優・久我美子が主演。後者は気鋭の犬童一心監督で今をときめく広末涼子が主演。どちらも妻と鑑賞し、感想を語り合いましたが、「もう一遍観たいなぁ」と一致したのは後者の高画質なCG多用画面ではなく前者の素朴なモノクロ映像でした▼色んな要素を合わせた結果としてそうなったのでしょうが、詰まるところ「人間の違い」としか考えられません。まだ人の繋がりのあった戦中戦後に生きた人々が、撮影・音楽・美術・衣装などに職人技を駆使し、一体感ある現場で作り上げた作品と、個人主義が頂点に達した現代に、細かく分業化され、大半をコンピュータに依存して作られた作品と、一体どちらが心に響くか。いわば、栄養や熱量は同じでも味わいがまるで異なる、母親の手料理とFF（ファストフード）の差とでもいった所でしょうか▼だからという訳ではありませんが、近年の話題作に財布を叩きながら後悔を重ねてきた者として、出費を伴う物にはその多寡を問わずそれなりの心が籠っていなければと改めて思います▼本紙の有料冊子も然り。毎月唯の記事ではなく、地域の心、区民の心、記者の心をこそ届けたいと、特に取材・執筆にはこまめに手足を使い、何より気合を込めて当たっています。ということで、果たして一冊三百円は高いか安いか、物思う秋、よ～く考えてみて下さい（ドキドキ）。

×　×　×　×　×

「ここは地獄か天国か」「主役はサタンかキリストか」―。舞台に呼応する聴衆の物凄い興奮と集中に、そんな尋常でない感覚が全身を捉えました▼八幡屋出身のロックドラマー桐田勝治さんの招待で鑑賞したロックコンサート（32頁）。超人気バンドだけに巨大なフェスティバルホールも超満員。なぜかみな立ったまま。心臓を叩く大音量。肉がちぎれんばかりの動きで怒鳴るように歌う中心歌手。腕を突き上げながらジャンプを繰り返す聴衆。「床が抜けるかも…」という現実的な恐怖さえ頭を掠めました▼ふと口ずさむ鼻歌といえば舟木一夫か橋幸夫という筆者にはちと刺激が強すぎたようですが、このところ港区の秋のイベント取材で疲れ気味だった身にはこの上ない気分転換となりました▼それにしても聴衆の大半を占めた若者の噴き上げるようなパワー。そして壮年（四十～五十代）とは思えぬ演奏メンバーの凄まじい爆発力。「どこからあんなエネルギーが湧いてくるのか」とちょっぴり羨ましく、また「あの元気を生かせば日本はまだまだ行けるぞ」と頼もしくも感じたものでした▼その上でさらに思ったのは、「あの元気を生かせる場が今の日本に果たしてあるのか」ということ。特に若年層は就職もままならず、あってもバイトかパート か派遣か臨時、正規と思えばブラック企業！　無心に叫び、飛び跳ね、拳を突き上げていた若者を、無性に愛おしくも感じた帰り道でした。

区民行事

爽やか秋空に歓声

新「区民まつり」多彩な催し

→秋空の下に歓声が溢れた「第39回港区民まつり」＝10月13日、八幡屋公園（写真はジャンボ縄跳びで優勝した市岡チームの跳躍）

爽やかな秋空の下に笑顔と歓声が溢れました。十月十三日（日）に八幡屋公園で開催された「第三十九回港区民まつり」には区民約一万三千人が参加。朝十時頃から午後四時頃まで、運動会や模擬店など多彩な内容を楽しみました。

港区コミュニティ育成会議（大阪市コミュニティ協会港区支部協議会と港区役所）が主催。

◆校下対抗運動会の新バージョン

このうち最大規模の「みなりんピック」は、これまで隔年で開催されてきた「校下対抗港区民運動会」のニューバージョン。築港中学校吹奏楽部による「日本を勇気づける名曲メドレー」（世界に一つだけの花」「どんな時も」「愛は勝つ」「負けないで」「全力少年」「明日があるさ」など）の演奏で華やかにオープン。各小学校下チームの出場選手が思い思いの扮装（ふんそう）でにこやかに手を振りながら入場行進しました。

→オープニングを飾った築港中吹奏楽部の演奏㊤と、個性豊かな各チームの入場行進風景㊦

←挨拶する武智虎義（とらよし）・大阪市コミュニティ協会港区支部協議会会長㊤と田端尚伸（ひさのぶ）・港区長㊦

開会式では武智虎義・大阪市コミュニティ協会港区支部協議会会長が「今年になってコミュニティ育成会議がスタートし、各種イベントに検討を加えているが、この催しについても話し合いを重ね、『よりみんなが楽しめるように』と内容を決定した。このまつりがより豊かな地域社会へのステップとなるよう期待している」、田端尚伸・港区長が「今、港区では、各催しの良い所は継承しながら『もっと楽しめる形がないか』と公募の区民も入れて検討を重ねているが、この区民まつりもそんな中で考えられた。この

←宣誓する岡田正さん・大黒広美さん㊤と、スタートのピストルを撃つ体育指導員㊦

催しを通じて区民のつながりがさらに強まり広がることを願っている」とそれぞれあいさつ。市岡チームの岡田正（ただし）さんと大黒広美（おおぐろひろみ）さんが「私たちの町がより安全・安心で楽しい地域になるよう、このみなりんピックがより楽しいものになるよう、全力で競技することを誓います」と宣誓しました。

◆小学生らが気持ちよく走った

このあと「合同ラジオ体操」を皮切りに、校下対抗による「紅白玉入れ」、五中学校対抗による「男子綱引き」、港区地域女性団体協議会と港区体踊同好会による「民踊」、さらには一般参加（当日受付）による「スリッパ飛ばし」「借り物競走」「スプーン競走」などの競技が次々と進行しました。

このうち「幼児一〇〇メートル競走」に参加した石川司（つかさ）くん（三歳）の母親・翠（みどり）さん（三先）は「保育園（かよ）に通っていますが、競走は初めて。五位でしたが、よく頑張ったと思います。私はこのあと（出場者が足りないなら）ジャンボ縄跳びに出るかもしれません」。その横で司くんは賞品を手ににっこりしていました。

また「小学生八〇メートル競走」に出場し、予選で一位、決勝でも見事一位に輝いた玉城紗貴（たましろすずき）さん（弁天小学校六年生）は「学校の運動会ではリレーで三位だったので、ここで優勝できて嬉しいです。特に練習はしませんでしたが、もともと走るのは好きで、普段は地域のサッカークラブで活動しています。今日は思いっ切り走れたのが気持ちよく、そのうえ優勝までできて最高です。来年は中学生ですが、走る競技があれば、また出たいです」。その横で友達が「いいなぁ」と羨（うらや）ましがっていました。

→港区地域女性団体協議会による民踊㊤と、小学生80m走で優勝した玉城紗貴さん㊦（右）

また「ジャンボ縄跳び」で「四十四回」という他チームを圧倒する記録で優勝した市岡チームの一員・小松弘武（ひろたけ）さん（四一）は「十月に入ってから市岡小学校で三回、各一時間ほど練習しましたが、その成果が出ました。記録はまあこんなもんでしょう。このあと私は『むかで競走』にも出ますねん」。その横で同チームの女性がVサインをしていました。

◆跳び箱で驚異の記録

また「跳び箱」小学生の部・決勝では池島小学校六年生の浜田君が驚異的な十七段を飛んで優勝し、注目を集めました。同じく大人の部・決勝ではゲストの田中健太（けんた）さん（城東区在住の二十一歳学生）が、準優勝・入江真太郎（いりえしんたろう）さん（田中校下）の十一段と三位・竹ノ下学（まなぶ）さん（池

←跳び箱で驚異の17段を跳んだ浜田君㊤と、むかで競走で三先チームを抜く市岡チーム㊦

島校下）の十段を抑えて優勝。さらに港区新記録である十五段を樹立して盛大な拍手を浴びました。田中さんは「西区のＷＭＣＡで子供たちに体操を教えていますが、個人的にはベンチプレスやレッグプレスで鍛えています。港区の大会で優勝できたので、港区が好きになりました」。その横で友達が「『港区に住みたくなりました』と言え」と冷やかしていました。なお跳び箱の一段の高さは子供用と大人用で違います。

また最後の「むかで競走」では、これで順位が確定するとあって、各校下テントからの声援が最高潮に達しました。このうち築港校下テントでは、錨（いかり）マークと「ＣＨＩＫＫＯ」の文字を白く抜いた紺染（こん）めの前掛けを腰に着けた男女が声を枯らして応援。そのうちのある男性は「皆でデザインを考え、それを抜き型にし、そこへ白い塗料を塗り込んで作ったんです」と地域の結束をアピールしていました。

◆市岡チームが2連覇

閉会式では校下対抗の三競技の合計得点に基づく成績発表と表彰が行なわれ、三十一点で優勝した市岡チーム、二十八点で準優勝だった池島チーム、二十六点で三位だった三先チームに武智会長と田端区長から賞状とトロフィーが贈られました。

このうち市岡チームは三競技とも一位という抜きん出た戦いぶりで前回（二〇一一年）からの二連覇を達成。リーダーの平井新三（しんぞう）さん（七二）は「ほぼ完全優勝ですが、これも地域の和のたまもの。特に世代交代が功を奏し、若い人たちが活躍してくれたのが大きかったです」。その横で武智虎義・市岡地域活動協議会会長がケーブルテレビのインタビューを受けていました。

→むかで競走に声援を送る磯路応援団㊤と、揃いの前掛け姿がユニークだった築港応援団㊦

→2連覇を達成して大喜びの市岡チーム

←大盛況だった各地域活動協議会の「模擬店」㊤と、桜栄会による「食生活改善コーナー」㊦

◆ゆるキャラ人気、体力測定に関心

この他、多目的広場では各地域活動協議会による飲食などの「模擬店」が、芝生広場では「こどもステージ」と題して「ライブ」「ゆるキャラ撮影会」などが、小公園や大阪プール裏広場や通路ではNPOや各種団体による「啓発展示」や「ミニ新幹線運転」「フリーマーケット」などが行なわれ、家族連れなどが楽しんでいました。

このうち小公園の「体力測定コーナー」で骨密度・握力・長座体位前屈の検査を受けた武田良雄さん（七五）・幸子さん（七四）夫妻（池島）は「二人とも年齢相応ということで、安心しました。四カ月ほど前から毎晩一時間半ほど、この八幡屋公園でウォーキングを続けていますが、それが良かったのかも」と話していました。

◆裏方も活躍、今後へ提言も

こうした催しのそれぞれには、進行・放送・清掃・ライン引き・器具揃え・賞品渡し・得点表示などに汗を流す体育指導員や青少年指導員、子ども会役員など様々な裏方の働きがありましたが、その一人の四十代男性（波除）は終了後、次のように話していました。

「毎年、地域のために役立ちたいと準備・設営・片付けなどに携わってきました。今年は地域活動協議会の発足を受けて新たな形で実施されましたが、より多くの区民に楽しんでもらうという点では良かったのではないでしょうか。その上で、①たくさんの催しが同時進行するため一部にしか参加できない②時期的に地域や学校の催しと重なりやすい③来年以降の開催が明確でないので継続して取り組もうという意欲を持ちにくい④地域ごとの取り組みやコストダウンを強調する割には設営や片付けなどをレンタル業者などへ一括発注して済ませていたーなどの問題も見え、今後の課題として考える必要があるように思いました」

かつてない新しい形で開催された「港区民まつり」。参加者や裏方の声を踏まえてさらに充実・発展させることが期待されます。

←関心が高かった「体力測定」㊤と、若者にも受けていた「ほっこり（癒し）エステ」㊦

→大人も喜んでいた「ゆるキャラ撮影会」㊤と、幼児に大人気だった「ミニ新幹線運転会」㊦

シリーズ・私の提言

叫んでいいとも！

今月の提言者

石井　ひさ子さん（八幡屋）

波除も区役所前も通る
青バスのルート守って

コミュニティバス（赤バス）は、港区では、波除エリアや池島八幡屋エリアなど幹線バスから離れた地域の、とりわけ足の弱い人々の「生活の足」としてかけがえのない役目を果たしてきました。橋下市長の「赤バス廃止」のもとでも、代替手段を委ねられた港区長が委託公募によって「港区ループバス（青バス）」を採用し運行されています。

◆生活ささえる「いのちづな」

赤バスの時には一日三六一人（平成一七年一月十五日交通局調べ、波除エリアが八一人、池島八幡屋エリアが七七人、区役所など区中心部への用向きが八三人）の利用があり、青バスの今、低床でない小型観光バスの転用のため「乗り降りがむずかしい」「手押し車が乗せにくい」などによって減っているものの、一日平均二二五人（平日平均は二三八人）の利用が毎日あり、日常生活をささえ、「いのちづな」にもなっています。

◆「青バス」まで廃止とは

ところが港区長は、『既存路線との競合を避けるため、駅から五〇〇㍍、バス停から三五〇㍍の半径の円内は不便でない』との交通局の設定のまま、「弁天町駅と九八号系統のバス停に近い波除エリアは不便ではない」と決めつけ、唯一の理由に「新四四号系統（弁天町ターミナル～中央大通～八幡屋三丁目往復）を通せば、区内

←赤線は現在の港区ループバス（青バス）のルート。港区長は「44号系統（白抜き線）を通せば区内に交通不便地区はなくなるので青バスを廃止する」と言っています

の交通不便地域は解消する」として「来年三月末で青バス廃止」を表明＝前頁図参照。交通局が「同四月から新四四号系統に一般バスを運行する」として、その系統の停留所選びにかかっているもようです。

◆交通弱者の「足」切り捨て

そうなれば、波除エリアは生活バスルートを全く失います。池島八幡屋エリアからも区役所など区中心部に乗継（のりつぎ）なしには行けません。現実の利用者（一日三六一人あるいは二二五人、そのほとんどが乗継困難な交通弱者です）の「足」を切り捨てることになってしまいます。この事態は絶対に避けなければならないのではないでしょうか。

◆乗継なしに区役所へ行けず

すでにコミュニティバスは両エリアにとどまらず、お年寄りや赤ちゃん連れ、自転車や歩行が困難な人など、高齢化の進む中で、全区的になくてはならない役割を担（にな）っています。それをばっさり削ることは、港区にとっての大きな損失です。交通局案（市バス民営化方針案）の「新四四号系統」のみになれば、赤バス青バスの実績からも利用者激減は必至であり、多くの区民が「自らの区役所にさえ乗継なしに行けない」格下げ区になってしまいます。

←橋下市長による「赤バス廃止」のもとでも港区役所からの委託で代替手段として運行されている「青バス（港区ループバス）」

◆区民の力で最低限、青バスルート確保を

来年度の市バス路線の港区内の再編にあたっては、「四四号系統の変更」とする場合でも、少なくとも「港区ループバス（青バス）」のルートを確保するべきではないでしょうか。

「赤バスの存続を求める会」として、この趣旨の要望書を市交通局と港区長に提出し、回答と協議を求めています。この要望への区民のみなさんのお力添えをお願いしますとともに、地域各分野から、市交通局と港区にこの要望を寄せられるよう呼びかけます。

（赤バスの存続を求める港区連絡会　代表）

代筆

～何でも書きます、まとめます～

★手紙・案内・報告・宣伝・司会などの文案
★自分史・社史・団体史などの聞き書き
★新聞・広報・書籍・会報などの取材・編集

港新聞・飯田編集事務所

TEL・FAX:06-6571-4636

Eメール:yamaemi@bridge.ocn.ne.jp

http://osaka-minatonews.sakura.ne.jp/

防災

要援護者を誰が支援？

図上防災訓練、さらに具体的に

→要援護者支援など「地域防災計画」作りへ更に前進した図上訓練（写真は10月25日、田中小で避難地図を作成する田中3丁目の人々）

「ここは心臓の悪いおばあさんが一人暮らしやから『要援護者』のマークを入れておきましょう」「災害時の支援はとりあえず向かいに住む私が担当しましょう」―。九月から十月にかけて、区内の各小学校区で「図上訓練」が行なわれ、近い将来の発生が確実視される南海・東南海地震などに備えての「地域防災計画」作りへさらに前進しました。このうち田中小学校区では十月二十五日夜に同校で実施され、田中・夕凪地区から二百人超が参加しました。港区役所と天阪市危機管理室が主催。港区役所からは副区長や防災担当者が参加し、指導や助言を行ないました。

◆「避難マップ」を作成

訓練は大阪市危機管理室・山口防災アドバイザーがリードし、①東日本大震災からの教訓②地震のメカニズムと被害想定③図上訓練④地震発生からの行動⑤まちの自主防災組織―の流れで進行しましたが、中心となったのは「図上訓練」でした。

ここでは与えられた課題を町会ごとに解決していく形で進められ、最初の「避難マップ作り」では、地図上に、①各自の家の位置②集合場所③公園・空き地④津波避難ビル⑤要援護者（高齢者・障害者・妊産婦・病人・怪我人・外国人など）のいる家やアパート⑥車両が対面通行できる道路⑦要援護者を避難させるルート⑧病院・薬局・公衆電話などの所在⑨防火設備・防火器具・救助機材（フォークリフト・ジャッキなど）の保管場所⑩危険な箇所（旧耐震基準による建物、倒れそうなブロック塀・樹木・灯篭・石垣、壊れそうな橋・歩道橋、危険物を貯蔵している施設、落下しそうな看板・屋根・ガラス・電線など）―を次々とマークしていきました。

◆「避難行動のポイント」を話し合う

次に「避難行動のポイント」として、①情報伝達はどんな方法で行なうか②安否確認はどんな方法で行なうか③集合場所はどこにするか④要援護者をどう支援するか⑤津波避難場所はどこにあるか―などが話し合われ、各町会からその発表が行なわれました。

このうち田中三丁目町会の代表は「情報伝達は班ごとに班長が声をかけて回る」「安否確認は玄関のドアノブに白いタオルが吊るしてあるかどうかを見て行なう」「集合場所は田中三丁目集

会所にする」「要援護者支援は班ごとに声をかけ合うことを基本にするが、可能なら福祉施設（第一港晴寮）職員や若者の力も借りる」「津波避難場所として港スポーツセンターを利用する」などと発表しました。

このほかに「（安否確認の方法として）タオルだけでなく、新聞紙など、とにかくある物で知らせよう」「（津波避難場所としては）隣の校区だが近い位置にある磯路小学校はどうか」などと話し合った町会もありました。

これらの発表に対して山口アドバイザーは「福祉施設や他地域との連携が始まっているのが素晴らしい」「要援護者支援では担当者がいない時のフォローも考えられていることに感心した」「安否確認では（タオルだけでなく）何でもある物を使おうという意欲と柔軟性が見られる」などと評価しました。

→「この辺は古い家が多いで」「ここは足の悪いおばあさんが一人暮らしや」と額を集めて避難マップを作り上げていく各町会の人たち

◆東日本大震災の教訓など強調

訓練ではこのほかに、①まず正しい情報をつかむことや急な状況変化にも対応できる力を各地域で培（つちか）うことの重要性が東日本大震災の教訓として明らかになった②港区では東南海・南海地震で死者一名、上町断層帯地震で死者一一九名が出ると予想される③田中小学校区では東南海・南海地震で死者ゼロ、上町断層帯地震で死者八～八名が出ると予想される④情報伝達・安否確認・初期消火・救出・救護・搬送・誘導・他地区や区役所との連携などを各町会でできるところまで訓練を重ねることが望ましいなどが、スライドなどを使って強調されました。

◆「より正確で具体的になった」

参加したある女性は「もう四～五回参加していますので、良い復習・確認になり、そのつど知識はより正確に、行動のイメージはより具体的になっていくように感じます。防災訓練はこうして回を重ねることに意義があるのではないでしょうか」と話していました。

また図上訓練に初めて参加したというある男性は「地震・津波に対処するための全面的で具体的な内容に感心しました。その上で、いざ災害が発生した時には、とりわけ要援護者支援が重要だと感じました。私の町会では、今日はそこまで具体化されませんでしたが、どの人には誰が付くというところまで煮詰めていけば、さらに実効ある地域防災計画になるのではないでしょうか」と話していました。

←集合場所（緑丸）、要援護者の家（青丸）などがマークされた避難マップ例㊤と、話し合った避難行動のポイントを発表する町会代表㊦

読者コーナー

先ず自国語を！

（池島1・勝部泰臣（かつべやすおみ）80歳）

電車に乗っていて真っ先に気づくのは、スマホ、ケイタイをいじってる人の多さ。本など読んでる人はきょう日（び）まれである。児童もしかり。〝本離れ〟はますますその度を越していく。

十月二十三日の朝刊に大阪市教育委員会が公表した今年四月の学力テスト（中三と小六が参加）の結果が情けない。何と全国平均よりどの分野も正答率は下回り、無回答率は上回り（これが逆ならいいんだが）。気になるのは生徒のアンケートに「問題の意味が分からない」が多かったことだ。市教委の委員の指摘。「言語力の低下が問題だ」「社会生活にまで影響する可能性がある」「市全体で対応を考えないと」―。遅いんだよ、今更そんなこと言って。国際社会に活躍できる人材育成に「英語を早くから習わせよう」と叫んだ人はどなただったか。自国語も充分に理解してないのに何が国際人育成だと反発感じた人は多かったはずだ。

日本語の美しさ、奥深さ、他国語に比べてもどんなに素晴らしいか、今こそ全ての人が再認識すべきである。

市民学習センターは充実させるべき

（区内・40代公務員）

「市民学習センターを守れ！」（前号1頁）を読んで。弁天町市民学習センター利用者の声に胸打たれました。この方たちにとって「生きがいの場」というのは実感だと察します。住民サービスに携わる公務員の一人として身につまされました。こういう施設はむしろ充実させる方向でこそ考えられるべきです。自治体にとって財政健全化は確かに重要ですが、それは住民の幸福に資する方向で組まれてこそ意義を持つのであって、そこの一番大事なところが大阪市の「改革」には欠けている、つまり財政健全化やコストダウンが目的化し、独り歩（ひとり）きしているのではないでしょうか。この流れは全国的なもので、私の働く自治体もご多分に漏（も）れませんが、特に大阪市はその先頭を走っているようです。持論（じろん）を言えば、極力無駄を省いた結果として破産するなら、それはそれで仕方のないこと、その時は職員間や住民間の助け合い、また国からの支援で乗り切ればいいと思っています。それはともかくとして、毎号こうして市政に対する市民の喚起（うなが）を促されるのを、公務員として（無責任なようですが）頼もしく思っています。

→読者の作品から辻悦子さん（市岡元町3）の絵手紙

さすが河田教授、充実の防災講話

（田中・60代男性）

毎月冊子を届けて頂き、ありがとうございます。今月は「巨大地震・津波で港区は?」（前号9頁）が印象に残りました。あの東日本大震災以来、どうしても防災には敏感になってしまい

ます。このフォーラムで講師を務められた河田教授はとても有名な方で、その方がまさかこの港区へ話しに来られたとは知りませんでした。それだけ、海に近い港区の防災に関心を持たれたのでしょう。講話の内容は紙面で見る限り、「江戸末期の大規模災害三連発こそが国難となった」という歴史的事実から、「南海トラフ大地震と津波で港区はほとんどが水没する」という近未来予想まで、とても多彩で充実していたように思えます。中でも「大阪グランフロントなどの遊興施設は一流の設計者や建設会社が関わっているにもかかわらず、人集めに気を取られて安全は二の次。大震災の教訓が生かされていない」という指摘には一市民として「そんなアホな」と戦慄（せんりつ）を覚えると共に、「南海トラフ巨大地震で大阪の予想死者数が数千人に対して和歌山は八万人。公助（自衛隊）は和歌山へ向かう。大阪は自助・共助で持たせなければいけない」との警告には市民として「そらそやろな」と注意を喚起されました。いつも港新聞ではこれぞと思う大事なイベントはとても詳しく報道されていますが、これもその一つだと思います。ためになる記事に感謝します。

笑って温もった「盲導犬チャリティ」

（波除・60代男性・元教師）

毎月ネットで見ています。今月は「盲導犬チャリティショー」の記事（前号27頁）が良かったです。私も知人からチケットをもらって観（み）に行ったのですが、まさにその通りの内容が記事になっていて、びっくりしました。藤かほりさんの歌いっぷりの恰好（かっこう）良さ、正司敏江（しょうじとしえ）さんの喋（しゃべ）りの面白さ、その他のゲストの方の熱唱や演奏…。とにかく大いに笑い、大いに心温（ぬく）もった一時間半でした。そして、最後に書かれていたように、舞台にも客席にも「世のため人のため」の想いが溢れていたように思います。長く住んでいる港区ですが、「港区って、ええ所やなぁ」と改めて感じさせてくれた催しでした。

↑読者の作品から尾崎キヌ子さん（池島3）の絵手紙

居ながらにして「観月会」楽しめた

（夕凪・50代女性・元教師）

港新聞のホームページから「被災地復興を願って　天満宮で観月会、多彩な演目」（前号33頁）を読んで。ひとくちに「観月会」といっても、単に月を愛（め）でるだけではなく、「ヤマタノオロチ」の影絵あり、若い方のライブあり、日本の唱歌あり、珍しい「声明（しょうみょう）」あり、「祝詞（のりと）」の奏上（そうじょう）ありーと実に多彩で中身のある出し物だったようで、その模様が解説も入れて詳しく紹介されていたのが嬉しかったです。そしてその中から、天満宮の宮司（ぐうじ）さんたちの被災地への熱い思いが伝わってきました。体調を崩して職を辞し、あまり外出できない身として、貴紙を通じて、居ながらにして色んなイベントを楽しめ、学べることに、心から感謝しています。

猪伏少年の頑張りから今の教育考えた

（南区岡・70代女性）

猪伏（いぶし）昌三様の「戦争体験」に毎号心打たれている者の一人です。今月（前号3ページ）は、発疹チフス（はっしん）でお父様が亡くなられたあと、まだ少年であるにもかかわらず、一家の柱として、豆腐売り、鉄工所、風呂屋…と次々に仕事を変えながら家族を支えられたことに、本当に頭の下がる思いがしました。戦中派の方の精神力の強さを改めて感じると共に、今の青少年にこのようなたくましさがあるのか、はなはだ疑問に思いました。私の家の近くにも小学校があり、みんな可愛らしくてそれなりに個性がありますが、どこかひ弱に感じられてなりません。「生きる力」が強調されている割には、小さい頃から受験競争ばかりさせられて、他人と力を合わせることや、しんどくても耐えることが重視されていないことが原因ではないでしょうか。出来ないことも「個性」と言って認め、鍛えることをしないのでは、もはや教育とは言えません。戦前・戦中の教育が全て良かったと言うつもりはありませんが、良い所（目上の人を敬うこと、できるまでやらせることなど）は残すべきだと思います。猪伏様の戦争体験からは、戦争の悲惨さや平和の大切さと同時にそんなことも考えさせられ、教えられるところ、非常に大です。

「入舟市場」の看板から地域考えた

（区内　P・N）

いつも「港新聞」を楽しく購読させて頂いております。近くにある、かなり老朽化の進んでいる建物が気になっていました。よく見ると「入舟市場（いりふねいちば）」という看板がかろうじて残り、今にも崩れそうです。いろいろ調べてみたところ、昔の地名にもあるように、その近くの八幡屋市場のようなものがあったのだと思うのですが、そういう貴重な歴史資料もなくなってしまうのは残念です。過去には残忍な事件（戦争で丸焼けになったことか？＝編集部）などもあった港区ですが、そういった建物をきっかけに何か将来に伝えていくことはできないのでしょうか。

編集部から　消滅した「入舟市場」だけでなく、昔は活気があった港区の商店街や市場がどんどんさびれていくのは本当に悲しく思います。戦後、特に高度経済成長期を通じて、流通と消費の形態がアメリカ型に変わり、大型店や量販店、チェーン店の進出で、地域に密着していた地場（じば）の店が圧迫・淘汰（とうた）されていったのが一番の原因だと思います。この流れはもはや変えようがありませんが、ご意見のように、そういう流れに「これでよいのか」と寂しさや疑問を感じ、さらに「消滅しつつある物から何かを伝えられないか」と地域の将来を考えることはとても大切なことだと思います。本紙でも機会を見て、こういう問題を取り上げられたらと思っています。貴重なご提言、ありがとうございました。

→読者から指摘のあった「入舟市場」跡。看板は見当たらなかった＝10月28日撮影

あれこれガイド

●ムチ打ち（首・腰）無料相談会　交通事故でムチ打ち症になった被害者を対象とした無料相談会。十一月二十四日（日）十～十八時に行政書士のむら事務所（築港三-七-一-六〇八）で。一人約一時間。事前予約制（電話かEメールで）。「どうしたら正当な補償が得られるかをアドバイスします」「事故後、早めの相談が良い結果につながります」（同事務所・野村光恵（みつえ）さん）。Eメール：info@jiko110-nomura.com、TEL：六五七六-六〇七八、FAX：六五七六-六〇七九。

●池島ふれあいまつり　地域の誰もが交流し楽しめる健全な文化の場として町ぐるみで盛り上げる恒例イベント。三十三回目。十一月二十三日（土祝）十～十五時半、池島公園（雨天時は池島小学校講堂）で。入場無料。①ふれあいステージ（幼児や小学生の歌や踊り・和太鼓演奏・金管楽器演奏・大道芸など）②ふれあい広場（ミニSL・トランポリンなど）③いこいの広場（わらぞうり作り・ふれあい喫茶など）④ふれあいキッズ（紙芝居など）⑤バザー・模擬店―など楽しい企画が毎年好評＝**写真左㊤は昨年の会場風景。**池島地域活動協議会が主催。☎六五七一-〇二〇〇海の子学園池島寮。

●緑の地球ネットワーク（GEN）　中国山西省大同（だいどう）市の黄土（こうど）高原で一九九二年から緑化協力（さんせい）を続ける認定特定非営利活動法人＝**写真右㊦はイメージ**▽GREENなんでも勉強会「森に降りそそいだセシウムのゆくえ」（仮）＝岡田直紀・京大大学院准教授が、福島第一原発から約二十キロメートルに位置する川内村での調査を元に、事故で降り注いだ放射性セシウムの行方に迫り、自然や食品への影響などを報告。十一月二十七日（水）十八時半～二十時半に「ひと・まち交流館京都」（京都市下京区西木屋町通上ノ口上る梅湊町八二番地の一）で。参加費七百円（学生三百円）。定員四十人▽詳細はGENの事務所（市岡一-四-二四-五階　☎六五七六-六一八一）へ。

●団結もちつき大会　労働運動の高揚めざして労働者と地域住民が餅をつき、食べながら交流する四十年来の伝統行事。中小労組・労働者の集まりである全国金属機械労働組合「港合同」と同もちつき実行委が主催、NPOみなとが共催。十一月十四日（土）十三時から田中機械（南市岡三-六-一六）構内で。雨天決行。参加費無料。☎六五八三-四八五八港合同。

スポーツ短信

●少年硬式野球の大阪・港ボーイズ　三年生最後の和歌山大会初戦は四対一で勝利、二回戦は〇対四で敗退。京都大会は四強。北河内ジュニア大会は八強。九月から新チーム。大淀大会初戦は二対一も抽選負け。秋季支部大会は〇対一で敗退。十月十三日に三十期生十五名が南支部合同卒団式に参加。二十日にチーム卒団式。硬式に興味ある小・中学生の体験練習・入部説明会随時。☎六五七一-六七五三スポーツさんわ又は☎〇九〇-八三八五-四八一五香西。

スポーツ

食べた 走った 笑った！

「ごちそうマラソン」雨にも負けず

→本降りの雨の中を次々とスタートする「第4回大阪ごちそうマラソン」出場ランナー＝10月20日11時すぎ、港中学校グラウンド

「不況の中でも町の活気と商店街の心意気を感じてもらおう」と、交通法規を守って歩道を走行するユニークなスポーツ行事「大阪ごちそうマラソン」が十月二十日、港・此花・西区を舞台に行なわれ、約八百人の参加で盛り上がりました。「目に、おなかに、心にもごちそう」をコンセプトに、大阪ごちそうマラソン実行委員会が主催、大阪マラソン組織委員会と八幡屋商店街振興組合が共催。四回目。

◆演奏やコーラスでムード高め

前日からの本降りの雨の中、メーン会場となった池島の港中学校グラウンドには、揃いのオレンジ色Tシャツに透明レインコートを被った選手たちが集合。各選手のゼッケンには「ごっつぁんです！」「メッチャ食べたる」など思い思いのメッセージが書き込まれ、ハロウィン風などの仮装もちらほら。

同校吹奏楽部による軽快なマーチ演奏、区民合唱団による笑顔一杯のコーラスなどが祝賀ムードを高める中、午前十一時、三十五人ずつに分かれた二十四組が、薮井寿一さんら司会者のリードで「いっただっきま～す」と腕を振り上げながら次々スタート。その横からリュック姿の角正基実行委員長（八幡屋商店街振興組合理事長）らが「がんばれ～」と声援を送っていました。

←出発ランナーを元気づけた港中学校吹奏楽部のマーチ演奏㊤と、「さんぽ」の替え歌などでムードを盛り上げた区民合唱団のコーラス㊦

◆しっかり食べて完走めざす

出発を待っていた山口洋介さん（三六）ら三十代男女五人グループは、京都、福岡、兵庫などから各自、朝一番の電車でやって来たそうで、走ることで知り合った「にゅーたじま会」というグループのメンバー。同会のオリジナルTシャツも見せながら「しっかり食べて完走します！」と声を揃えていました。

同じく出発を待っていた平尾克幸さん（五

四)（磯路）は、二回目の参加。「普段はサッカーやウォーキングで体力づくりをしています。去年はちょっときつかったので、今年はタイムを気にせず、妻の順子と一緒に、食べながら楽しく完走しようと思っています」と話していました。

同じく出発を待っていた岩崎仁一さん（五二）（田中）は会社の同僚に誘われて初めての参加。「普段はソフトボールや剣道をやっていますが、このイベントに向けて二カ月ほど前から週一回走ったりして仕上げてきました。しっかり食べて完走が目標ですが、どちらかというと完走に重点を置いています」と話していました。

また、出発ランナーを元気づけた区民合唱団の代表を務めた河合友記子さん（八幡屋）は、「毎年『港区民音楽祭』に出場する各校下グループから希望者約七十人が参加しました。雨でキッズバンド・ヤハタヤ（八幡屋小の吹奏楽団）が出られなかったので、その分も頑張ろうと力が入りました。『手のひらを太陽に』と『さんぽ』を歌いましたが、『さんぽ』では歌詞をこのイベントに合わせて『渡し船』『たこやき』などに替えました。一カ月ほど前に楽譜を渡し、各グループで練習してもらい、今日はぶっつけ本番でしたが、雨の中で皆さんを元気づけることができ、とても嬉しいです」と話していました。

←降りしきる雨の中、24組のスタートを司会した数井寿一さん（中）と、出発を待つ京都などから参加の「にゅーたじま会」メンバー

◆走行ルール守ってのんびり

雨が降り続く中、選手たちは、八幡屋から田中→港晴→築港→海岸通→此花区→西区→南市岡→市岡→三先→夕凪→池島を経て同中学校をゴールとする約二十五キロメートルのコースを、制限時間（五時間）内で走りました。

ユニークだったのは、「信号を守る」「歩行者を優先する」「商店街は走らない」「横に広がらない」などの走行ルールを守り、大阪港ダイヤモンドポイント・海遊館・天保山渡船・安治川隧道・土佐稲荷神社・京セラドーム大阪などの観光ポイントを眺め、八幡屋商店街・港中央市場・八幡屋市場・港商店街・春日出商店街・九条キララ商店街・繁栄商店街・食鮮館カームなどで補給食を食べながら、のんびりと非計時で走ったこと。コースの要所では多くのボランティアが受付・誘導・飲食提供・救護などに活躍。沿道では道行く人たちが「頑張れ！」「しっかり！」と声援を送っていました。

◆八幡屋商店街に長蛇の列

このうち最初のエイド（補給場所）である八幡屋商店街では、次々と入って来る選手たちにボランティアが、たこ焼き、わらび餅、稲荷寿司、饅頭、どら焼き、バナナ、大粒の種なしブドウなどをふるまっていました。その中の六十代商店主は、ランナーが長蛇の列を作っているのを気にしながら、「タイムが目的やないので…まあええか」と笑っていました。

同商店街に入って来た選手たちの一人、谷川宏美さん（五八）（南市岡）はバナナなどを口にしながら、「地域の男性に誘われて初めて参加し

ました。体を動かすのが好きで、普段はフラダンスや太極拳をやっていますが、走るのは苦手。初めての距離で不安はありますが、完食・完走を目標に頑張ります」。その横で夫の良二さんがカメラを手に励ましていました。

同じく商店街に入って来た山内由美さん（三五）（三先）は「マラソンブームに乗って、娘（七歳の琴美ちゃん）と一緒に走ります」とにっこり。その横で夫の孝夫さんが自転車の上から「がんばれ」と励ましていました。

また同商店街のアーケード下では村松光さん（四八）（市岡）が三線（蛇皮線）で軽快なベンチャーズナンバーなどを披露。「レパートリーは二十曲以上ありますが、今日はランナーが気持ちよく走れる曲を選んで演奏しています。ここは音がよく響くので、前から演奏したいと思っていたところ、知人の斡旋で去年から演奏できるようになりました。ランナーを元気づけられ、自分も楽しめ、最高です」とさらに気持ち良さそうに演奏を続けていました。

→八幡屋商店街でたこ焼きをほおばるランナーたち㊤と、三先から初めて参加した山内由美さん・琴美さん母子と応援の父・孝夫さん㊦

◆繁栄商店街も手厚くもてなし

一方、最終盤のエイドである南市岡の繁栄商店街では、同商店街の守り神である「韋駄天尊」像を通路に持ち出してボランティア数十人が待ち構えていましたが、トップランナー通過予想時刻の午後一時過ぎを回ってもその姿が見えず、「やっぱり雨で遅れとるんかなぁ」とやきもき。それでも、その一時間後にようやく現われた先頭ランナーを盛大な拍手と笑顔で迎え、甘茶、海苔巻き、、手打ちうどん、漬物、バナナ、ミカン、種なし柿、二十世紀ナシ、大粒の種なしブドウなどで手厚くもてなしていました。

◆誘導ボランティアの心意気

路上ボランティアのうち、南市岡一丁目のみなと通で雨の中、先頭ランナーを待っていたのは伴敬三さん（八八）（吹田市在住）でした。

「マラソンは高校時代からあちこちの大会に何度も出場し、三時間台で走ったこともあります。このイベントには大阪スポーツボランティアの一員として妻と一緒に参加し、妻はこの隣のポイントにいます。ボランティアは初めてで、まだ要領がつかめませんが、ランナーが通り始めたら、しっかり誘導し、声をかけたいと思っています」と話していました。

←繁栄商店街で丸徳寿司店の海苔巻きを食べる男性走者ら㊤と、南市岡2丁目のみなと通で走者を誘導するボランティアの伴敬三さん㊦

◆トップ集団に小学生

悪天候の影響からか、全体的に走行の遅れが

目立つ中、午後一時半ごろ、雲間から薄日が差す中を盛大な拍手と歓声に迎えられ、トップでゴールしたのは数人のグループでした。

その中の一人、八幡屋小学校五年生の玉田宙大君は、昨年までこのイベントのスタッフをしていた父親の政幸さん（四十代）が「今年は一緒に走ろう」と言い出し、友達にも誘われたことや、「もっと体力をつけたい」との思いもあって、初めての出場を決めたそうです。

「一カ月ほど前からお父さんと一緒にこの辺を走ったりして準備してきましたが、お父さんはまだ走っているようです。普段はサッカーをしています。今日は満腹状態で走れたのが楽しく、その一方で、つま先がだんだん痛んできたのが苦しかったです。大変疲れましたが、友だちのお婆さんの応援を受けて、大人の方たちと一緒にトップグループでゴールでき、今はとてもスッキリした気分です」と話していました。

◆全国色・国際色にあふれ

なお実行委員会事務局によると、このイベントにはインターネットなどを通じて八歳から八〇歳までの八五〇人（男性四四〇人・女性四一〇人）から申し込みがあり、うち七八三人が参加。地域別では大阪府の五五四人（うち大阪市二六九人、うち港区八五人）をはじめ、兵庫・京都・東京・鹿児島・青森などの都府県や、中国・アメリカなど外国からも参加がありました。またボランティアは八〇七人にのぼり、八幡屋連合など各町会連合の会員に加えて中国・韓国・カンボジアなどからの留学生も活躍。郷土色・全国色・国際色あふれる催しとなりました。また完走は七七八人で途中棄権は五人でした。

◆改善重ねる商店主ら

この「大阪ごちそうマラソン」は三年前、「東京夢舞マラソン」をヒントに港区内の三商店街（八幡屋・夕凪・繁栄）の商店主らが企画。実行委員会を立ち上げ、「大阪あきない祭り」の一環としてスタート。その後、市区民や参加者の感想や提言を生かしながら続けてきました。

第一回から事務局として準備・運営の中心を担ってきた伊藤雄二さん（五九）（八幡屋商店街の「光文具」店主）は「雨の中でも参加者には気持ち良く走ってもらえ、見る人には不況の中でも町の活気や商店街の心意気を感じてもらえたのではないでしょうか。ランナーさんはみな明るくて気持ちが良く、こちらも元気をもらいました。去年は三回目ということで認知度がアップして参加が多く、特に受け付けや荷物の管理が大変でしたが、その教訓から、今回は広い港中学校を借りたところ、この悪天候の中でもスムーズに事を運ぶことができました。また、ごちそうの量やエントリー料なども、これまでの教訓を生かして、より適切に改善することができました。毎年、家族ぐるみでお世話させてもらっていますが、来年についてはゆっくり考えさせて下さい（笑）」と話していました。

←玉田宙大君らトップ集団は雨の京セラドーム付近を快走㊤、港中学校グラウンドでは盛大な拍手に迎えられてゴール門をくぐった㊦

高齢者

楽しみながら被災地支援

区老連「さんま祭り」超活況

→秋晴れの下、三陸沖で獲れた秋刀魚を次々と炭火で焼き上げる港区老人クラブ連合会の男性会員ら＝10月27日朝、入舟公園で

「東北産の秋刀魚を食べて東日本大震災の被災地復興を支援しよう！」と十月二十七日、秋晴れの入舟公園（八幡屋）で、旬の秋刀魚を主役にしたユニークな催し「さんま祭り」が開かれ、大勢の来場者で賑わいました。港区老人クラブ連合会（区老連）の主催、港区老人福祉センターの共催で二回目。台風二十七、二十八号による雨の影響で一日延ばしての開催でした。

◆被災地に思いを寄せ

午前十時半からの開会式では原田壽・区老連会長らがあいさつに立ちました。

この中で原田会長は「大阪にも地震や津波がいつ来るか分からない中、また東日本大震災からの復興が未だ途上にある中、被災地である岩手県大船渡市から去年の倍の秋刀魚を送って頂き、復興を支援して、このように盛大に開催できることをとても嬉しく思っています。今年は多くの企業から協賛いただき、中学生も初めて手伝いに入ってくれました。区老連の平均年齢は七十五歳ですが、これからも行政とタイアップし、来年以降も秋刀魚の数をもっと増やしながら続けて参りたいと思っていますので、地域の皆さまのお力添えをよろしくお願いします」と呼びかけました。

←開会式であいさつする原田壽会長㊨と、焼き上がった秋刀魚を来場者に手渡す女性会員㊦

◆港区らしいイベントに賛辞

また田端尚伸・港区長は「被災地支援に軸足を置きながら自分たちも楽しむという素晴らしい発想と実行力に感嘆している。今年は中学生も加わって連携が広がったが、さらに輪を広げながらの発展を期待している」、武智虎義・港区地域振興会会長は「絆を大切にし、行政とマッチングし、活力と楽しさ、港区らしさに溢れたイベントだ」、西徳人・港区選出市会議員は「人生の酸いも甘いも噛み分けた皆さんが、まだ辛い中にある被災地の復興を支援する、大変

意義ある催しだ」とそれぞれこの催しへの賞賛と期待の言葉を贈りました。

◆白煙に被災地への想い

本部テントの前では、大船渡市の紺のTシャツや区老連のオレンジのTシャツに帽子や鉢巻きスタイルの男性会員らが焼き台を前に一線に並び、千三百尾もの秋刀魚を炭火で次々と焼き上げました。それを、やはりTシャツ姿の女性会員らが受け取っては、前売り券などと引き換えに来場者へ手渡しました。もうもうと上がる白煙が、区老連会員の被災地への想いと復興への心意気を表わしているようでした。

「五百円で焼き秋刀魚＋ご飯＋お茶」という手頃な価格設定も効いて、午前中を中心に午後三時頃まで、区老連会員や一般区民ら数百人が来場。昼食に持ち帰ったり、同公園内でビールやご飯と一緒に舌鼓を打ったり、様々の楽しみ方をしていました。

◆じっくり焦らずがコツ

焼き係の一人、中野憲雄さん（六四）（池島）は去年に続いて二回目。「じっくり焦らず、火を出さずに熱だけで、しかも適度な焦げ目が付くまで続けるのがコツ。水をかけるタイミングは、炭が火を噴き出す直前ですね。去年は予想以上に大勢の方が来られ、強火で手早く焼き上げざるを得ませんでしたが、今年はその教訓を生かして役員の方がうまく段取りを組んで下さったので、落ち着いてやれています」。

大倉義夫さん（七六）（弁天）も二回目。「先に苦労して（焼いて）、あとでゆっくりビールで楽しみます。この催しは、みんなでワイワイ楽しみながら復興支援できるのがいいですね。十五歳から二十二歳まで香川県多度津町の沖合（瀬戸内海）で漁師をして、イカナゴ、チリメンジャコ、タイラ貝、タコなどを獲っていましたので、魚を焼くのは慣れています」。

仁木功さん（七四）（池島）も二回目。「魚は嫌いですが、体は元気。今も二交替の職場で働いています」。また今年から老人クラブ会員になったという六十代の小谷悦子さん（弁天）は緊張の中にも笑顔を絶やさず、ペットボトルの水をタイミングよく秋刀魚に注ぐなどして焼きをサポートしていました。

◆お喋りしながら支援「嬉しい」

テント内でお喋りしながら、缶ビールやお茶を手に、酢橘の汁をかけた秋刀魚をおいしそうにつついていたのは、今村治代さん（七四）ら弁天長楽クラブの平均年齢七十歳の女性三人。「去年も来ましたが、同じクラブでも普段はなかなか顔を合わせられないので、こうして集まってお喋りしながら秋刀魚を食べ、しかも復興支援もできるのが嬉しいです」「震災や台風で被害に遭った方がたくさんおられるので、あまりはしゃがず、控えめに幸せをかみしめています」「家で待っている主人に、お土産に一匹買って帰ります」などと話していました。

←テント内でお喋りしながら秋刀魚を食べる弁天長楽会の女性たち㊤と、ビールや日本酒で楽しむシルバー人材センターの男性たち㊦

◆青空の下で「最高！」

公園の一角にシートを敷き、ビール、日本酒、ワインで秋刀魚を味わっていたのは河内成瑠（かわちしげはる）さん（六八）（生野区）ら六十代後半の男性八人。大正区、旭区、阿倍野区、此花区と住所はバラバラですが、みなシルバー人材センターの同じ職場の同僚とか。「チームワークは抜群です」「原田会長の旦那（だんな）さんが同じ職場で働いていて、その誘いで去年に続いて参加しました」「和気あいあいと楽しみながら被災地の復興を支援できる素晴らしいイベントだと思います」「こうして青空の下で煙を感じながら秋刀魚を頂くのは最高」「家で食べるのとはまた違うおいしさがありますね」などと口々に話していました。

◆「助け合い大切」と中学生

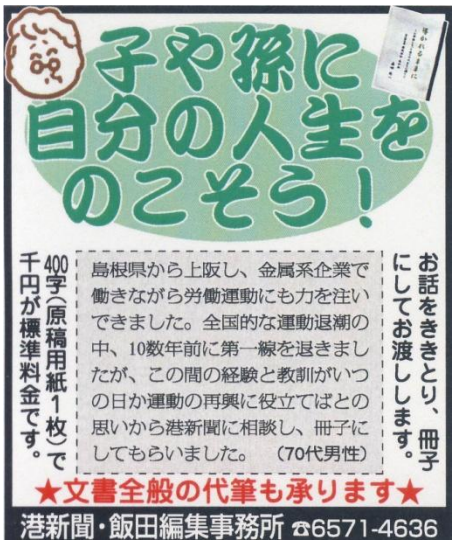
またこの催しには初めて港区の中学校から三校（市岡・港・築港）の生徒が参加し、アルファ化米（まい）（災害用の非常食の一つ）でご飯を作って提供するなどのボランティア活動をしましたが、そのうち市岡中の知花諒快（ちばなりょうかい）君、杉崇徳（すぎたかのり）君、渡邊寛士（わたなべかんじ）君（以上三年生）、青木一樹（かずき）君（二年生）の四人は「学校から『やってみないか』と呼びかけがあり、秋刀魚が食べられ、復興支援もできる、とても意義ある、しかも面白そうな活動だと思ったので、希望しました」「今日はアルファ化米をお湯で温（あたた）め、三百食分くらいのご飯を皆さんに提供しました」「この活動を通して、苦しい時にはみんなで助け合うことが大切なんだと改めて思いました」などと口々に話していました。

←アルファ化米をご飯にする中学生ボランティア㊤と、こんがり焦げ目のついた秋刀魚㊦

◆昨年の教訓生かしスムーズに

この「さんま祭り」は昨年、「被災地復興のために何かできることをやろう」と区老連役員会で立案。岩手県大船渡（おおふなと）市に相談したところ、感謝と賛同を得られ、同市役所から「大船渡のさんま」と印刷したTシャツを購入、三陸沖（さんりく）で獲（と）れた秋刀魚六百五十尾（お）を仕入れ、収益を寄付しました。

今年も同様の趣旨で開催が決まりましたが、去年の経験（秋刀魚の数が足りなかった上に、殺到する来場者に焼きが追い付かず、長蛇（ちょうだ）の列ができて慌ただしかった）を生かし、①秋刀魚の数を倍にする②会場を夕凪公園から入舟公園に変える③開会を一時間早める―など、運営全般に改善を加えたことが功を奏し、スムーズな進行が見られました。また四十企業が催しの趣旨に賛同し、協賛・協力に名を連（つら）ねました。



福祉

地域と溶け合い４０年

笑顔溢れた「海の子まつり」

→秋空の下で様々の出会いがあり笑顔が溢れた「第三十八回海の子まつり」＝10月27日、池島の児童養護施設「海の子学園入舟寮」で

「児童養護施設のことを地域の人たちに知ってもらおう」と十月二十七日（日）、「海の子まつり」が池島三丁目の「海の子学園・入舟寮」で開催されました。三十八回目。朝十時から午後一時まで、園生、職員、保護者、ＯＢら関係者に加えて地域の人々が多数訪れました。台風の影響で一日延期しての開催でした。

●食べ物や遊びが一杯

爽やかな秋空の下、明るいＢＧＭが流れ、「安いよ～」「うまいよ～」と元気な呼び声を響かせる園生たち。自分たちで準備したカレーライス、ジュース、綿菓子などの飲食模擬店や「千本釣り」「一円だま落とし」などの遊びコーナーに来場者が次々と引き寄せられていきます。中央の縁台で飲食する家族連れの表情は自宅にいるかのように穏やか。バザー会場では衣類・食器など超安値の品々に人だかりができていました。

四十年近くに及ぶ、こうした地域に開かれた活動の積み重ねが、この施設をすっかり地域と溶け合わせたように感じられました。

●「里親として今は幸せ」

奈良から二回目の参加という三十代夫婦は「この施設で三歳だった時に里親として引き取った女の子が八歳になりました。自由に健康的に育てて頂いていたお陰で、今は三人で幸せに暮らしています。今日はここで一緒に育った子らと食べたり遊んだりして楽しい時間を過ごすことができました」と話していました。

●「教えられること多い週末里親」

また大東市から二回目の参加という四十代夫婦は「子供がいないので去年からここの六歳の男の子の週末里親になりました。集団生活で挨拶などの躾が身に着いていることが感じられ、こちらが教えられることも多いです。今日は友達と遊ぶ姿など、家にいる時とはまた違う面が見られて良かったです」と話していました。

●２～１８歳が集団生活

同施設は昭和二十四年、艀労働者の子弟を養護する「海の子の家」として設立。現在は児童福祉法に基づく児童養護施設として社会福祉法人「海の子学園」が運営。保護者の病気や離婚など様々な事情から家庭で生活できない二～十八歳の子供たち（定員百人）が、保育士らに見守られながら集団生活を送っています。

医療・介護

ヘルシームード一杯

「健康まつり」多彩な企画で賑わう

→健康的な企画に参加者の笑顔が溢れた「第27回健康まつり」＝10月27日、磯路中央公園で（写真は市岡生涯学習民踊部の舞台発表）

「区民のヘルシーライフを応援しよう」と十月二十七日、磯路中央公園で「健康まつり」が催されました。大阪きづがわ医療福祉生活協同組合 港・西エリア健康まつり実行委員会（磯路）が主催。二十七回目。秋晴れの下、朝十時から午後三時ごろまで多くの区民が訪れ、健康をテーマにした多彩な催しで賑わいました。

◆「医療生協運動に力合わせよう」

オープニングを飾ったのは港中学校吹奏楽部によるトランペットなどの演奏。開会式では蒲生健（がもうけん）・大阪きづがわ医療福祉生活協同組合理事長が、一流ホテルによる食材偽装や英国での生協運動の歴史、安倍内閣の大企業優遇政治などから独占資本主義の弊害とその中での医療生協運動の役割を説き、「事業発展へ力を合わせましょう」と呼びかけました。

このあと舞台では健康体操、民謡、詩吟、太極拳（たいきょくけん）、和太鼓、コーラス、大正琴、民踊などが次々と登場し、盛んな拍手を浴びていました。公園内には同組合各支部やサークル、諸団体などによるフリーマーケットや模擬店などが並び、盛んに呼び込みを行なっていました。

←開会式で「医療生協運動の発展へ力を合わせよう」と呼びかける蒲生理事長㊤と、血圧や体脂肪などの健康チェックを受ける男性㊦

また「医療介護相談」「予防接種」「震災支援パネル」「火災時の煙体験」「非常食の展示・試食」などのコーナーにも関心が集まり、中でも毎年人気の「健康チェック」コーナーには開場と同時に老若男女が次々と訪れては血圧、体脂肪率などの無料検査を受け、結果に一喜一憂したり、診療所職員からアドバイスを受けたりしていました。最後はラジオ体操や河内音頭、抽選会での盛り上がりのうちに、倉澤高志（くらさわたかし）・みなと生協診療所所長の閉会挨拶（あいさつ）で幕を閉じました。

◆「ウォーキングや食事制限で健康」

参加者のうち、健康チェックを受けていた松下さん（七二）（磯路）は「いつも生協診療所でチェックしていますが、今月はやっていなかった

←華やかにオープニングを飾った港中学校吹奏楽部の演奏㊤と、「禁じられた遊び」などで聴衆を魅了した「もみじの会」の大正琴演奏㊦

ので受けました。血圧の上が高いのが気になりますが、まあ大丈夫でしょう。定年退職してから八幡屋公園や磯路中央公園でウォーキングをしたり、テニスをしたり、五年前からは食事の量を制限したりして、健康には気を使っています。この催しには毎年参加しています。年一回ですが、色んなコーナーで健康に注意を促してくれるので、年一回くらいやってもいいですね。それはそうと、これから大阪マラソンの応援に行こうかな」と話していました。

◆「妻のカロリー計算で家族健康」

同じく健康チェックを受けていた矢野新太郎（しんたろう）さん（四八）（夕凪）は妻の真美（まみ）さん（二〇代）、娘のひよりちゃん（五）と二回目の参加。「体脂肪率がちょっと気になりますが、血圧などは問題なかったです。運送の仕事で体力を使うので、運動不足になることはまずありませんし、家では妻がカロリー計算などして食事に気を使ってくれるので、家族で健康に過ごせ、メチャ幸せです。このイベントは大勢の人が集まって健康のことを考え合い、また普段は気にかけない非常食のことなどにも関心を促（うなが）してくれる、とてもよい催しだと思います。ずっと続いてほしいですね」と話していました。

→清らかな歌声で会場をいやした「パッチワーク」のコーラス㊤と、洗剤としたお動きで来場者を元気づけた「港健康歌体操」の実演㊦

←来場者の関心を集めた「非常食の展示・試食」コーナー㊤と、東日本大震災への思いを促した「震災支援パネル展示」コーナー㊦

◆「介護で苦労、今は幸せ」

また模擬店で千葉産落花生（らっかせい）や三陸産（さんりく）わかめなどを「あと少しですよ～」と呼び込みながら売っていた坂本京子さん（八一）（磯路）は「四十歳頃から地域活動や生協運動に携わり、今は老人クラブにも所属し、短歌も嗜（たしな）んでいます。今年になって八十八歳で他界した夫は認知症で、最後の一年間は介護が大変でした。ベッドで下（しも）の世話をしている時に蹴られて転落し、今も足と腰が痛みます。でも子供一人と孫一人がよくしてくれるので、今は気楽で幸せ。この催しは毎年楽しみにしています」と話していました。

教育

平和願い 入魂の語り

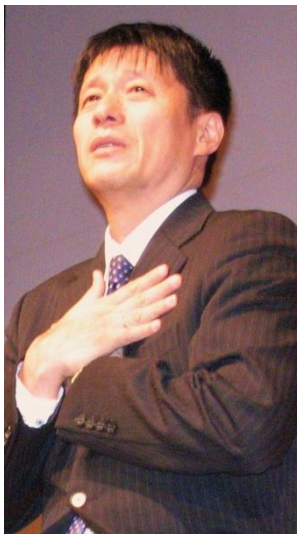
「港のつどい」で山田雅人さん

「二度と戦争が起きないよう、真実を語り伝えよう」―。十月十八日、港区民センターで催された「港のつどい」に大正区出身のタレント・俳優の山田雅人さんが招かれ、入魂の語り芸で平和を訴えました。この催しは「つながろう！平和のために！守ろう！子どもの未来を！」「集まれば元気 語り合えば勇気」を合言葉に港・大正・西区の幼・小・中教職員や地域の人々が交流する毎秋恒例の催しで四十四回目。主催は大阪市学校園教職員組合港支部などから成る実行委員会。

◆戦火に散ったプロ野球選手たち

山田さんはNHKラジオ「語りの劇場 グッとライフ」で様々な人物や出来事を自らの取材・構成で語り、「熱い泣き節」と好評を博していますが、その中から「今 平和を語る～戦火に散ったプロ野球選手 沢村栄治」を一時間に亘って熱演。戦死したプロ野球選手六十九人のうち、剛速球で伝説的な活躍をしながら二度の召集を受けて海の藻屑と消えた巨人軍の沢村栄治投手をはじめ、特攻隊員として沖縄の海でミットならぬ敵艦にストライクを投じた名古屋軍（現・中日）の石丸進一投手、同じく沖縄の海で犠牲バントならぬ体当たりを敢行した朝日軍（現・DeNA）の渡辺 静 野手らの物語を、感動的な逸話も交え、身振りや表情も豊かに演じました。

そして最後に会場の子供たちに向かって「戦争は憎しみしか生み出しません。その体験者がどんどん亡くなっています。四十年後には君たちが語り継いでほしい」と呼びかけました。



←身振りや表情も豊かに「戦火に散ったプロ野球選手 沢村栄治」を語る山田雅人さん

◆平和の尊さ、教育の大切さ

終演後、元教師で、今は要支援児教育に携わっているという青木勝美さん（六八）は「沢村栄治さんらの野球への情熱と、戦争で夢を断ち切られた無念さが伝わってきて、胸が熱くなり、平和の尊さを改めて感じました。港区で二十年間教壇に立ち、教え子には元大リーガーの野茂英雄さんもいます。山田さんのような優れた文化人が大正区の優れた教師の元から出たことを考えると、教育の大切さが改めて思われます」。

また築港から参加した三十九歳の男性は「山田さんの語りが胸に染み渡り、泣けました。平和であってこそ野球をしたり観たりできるのだと改めて思いました」と話していました。

◆公立幼稚園民営化や学校選択制に警鐘

つどいではこの他、職場・地域団体によるフリーマーケットやバザーが催されると共に、挨拶に立った浜口 徹・大阪市学校園教職員組合港支部長が「公立幼稚園の民営化や学校選択制、小中一貫校は、地域に根ざした教育を破壊し、教職員リストラにもつながる」と市の教育行政を批判。会場では「全ての子どもたちにゆきとどいた教育を」と国や大阪府に求める請願署名も呼びかけられていました。

商店街

好評！本の物々交換

繁栄商店街のふとん店前

→好評の「韋駄天さんのわらしべ文庫」。「眠っている本があれば持ってきてね」と呼びかける「ふとん館ひらのや」スタッフ＝繁栄商店街で

「♪助けられたり助けたりー」（昭和十五年『隣組』）ではありませんが、「持ち寄ったり持ち帰ったり」がいつでも誰でも自由にできるユニークな〝図書館〟が昨年六月にオープンし、人気を広げています。その名は「韋駄天さんのわらしべ文庫」。繁栄商店街（南市岡三丁目）の寝具店「ふとん館ひらのや」前にあります。同店の主人・近藤洋史さん（五五）＝繁栄商店街振興組合副理事長＝を訪ねました。

◆1冊持って来て1冊持って帰る

ヒントになったのは、港図書館の移動サービスや、他区の雑誌（『アトリエ此花メヂア』昨年五月号）で紹介された取り組みでした。「ネットの時代やけど、こんなニーズもあるんや」「移動ではなく常設の方がもっと便利やろ」と、さっそく家に眠っていた本箱を持ち出し、読み終えた何冊かの本を入れて店の前に置きました。温かみのある文庫名は同商店街の守り尊「韋駄天」に因んで妻の由香利さんや妻の妹の寛美さんと一緒に考案。そして三人で決めたルールは「読み終えた本を一冊持って来て、欲しい本を一冊持って帰ってね」と実にシンプルでした。

以来、買い物客や本好きな年配者を中心に、推理小説など様々なジャンルの本の〝物々交換〟が行なわれ、冊数は二百を超えて増加の一途。その傍らに、由香利さんの母親が趣味で作成したという古い新聞記事の切り抜き帳などが閲覧用に置いてあるのが微笑ましく映ります。

◆新たなコミュニケーションの場に

そんな中で嬉しいのは「図書館まで行けずに困っていたけど、近くでこんなことしてくれて助かるわ～」などの声を聞いた時だと近藤さん。

「こうして利用者が増えている背景には、自分の感動を他の人と共有したいという要求、自分の喜びを他の人にも分けてあげたいという善意、また互いの顔は見えなくても誰かと心の繋がりを持ちたいという願望があるのではないでしょうか。ネット全盛の時代にこの文庫がそんなコミュニケーションの新たな形になればと願っています。また商店街は単なる売り買いの場ではなく、地域の交流の場でもあるはずですから、この取り組みを通じてそういう本来の役割も果たしていけたらと思っています」。

問い合わせは☎六五八三-〇三三六同店へ。

趣味・娯楽

健康的な雰囲気で

みなと麻雀大会、桐本さん優勝

→独特の緊張感と健康的な雰囲気が印象的だった第37回「みなと麻雀大会」＝10月7日、磯路3丁目の「マージャンひろ」で

「認知症予防や生きがいづくりに効果がある」と注目を集めている麻雀（まーじゃん）。その愛好者による港区最大のイベント「みなと麻雀大会」（港区麻雀業組合主催）が十月七日、「マージャンひろ」（磯路三-一五-三、☎六五七四-六八四三）で開催されました。三十七回目。

◆賭けない・飲まない・吸わない

開会式では主催者を代表して竹馬進（ちくばすすむ）会長が「『賭けない・飲まない・吸わない』がモットーの健康麻雀は、頭の体操になり、ボケ防止や認知症予防に最適。全国健康福祉祭（ねんりんピック）の正式種目にも採用されています」と健康麻雀の効用を紹介し、参加者を激励しました。

大会では八十～四十歳代の男女三十八人（うち女性十四人）が正午から九卓を囲んで四回戦を行ない、数時間に亘（わた）る知的な駆け引きの末、優勝は桐本皇二雄（きりもとふさお）さん（七八）（西区立売堀（いたちぼり））、準優勝は徳丸寿子（とくまるひさこ）さん（八六）（港区築港）、三位は西本昌孝（にしもとよしたか）さん（八一）（港区南市岡）でした。

閉会式では境目孝義（さかいめたかよし）副会長が「麻雀業界は不況で厳しい状況にありますが、おもてなしの心で営業していますので、今後ともご愛顧を」と協力を訴え。表彰式では上位賞だけでなく、女性賞、当日賞なども設けられ、副賞には一～三位への自転車をはじめ、お酒、お米などを授与。和（なご）やかな雰囲気に包まれました。

◆賭け麻雀から健康麻雀へ

優勝の桐本さんは今年六月から「みなと麻雀教室」（マージャンひろで毎週日・火・金曜開催）に通い、この大会には初参加で初優勝。大会終了後、大要次のように語りました。

「出場仲間に『自転車を持って帰るで』と宣言したプレッシャーの中、よく頑張ってその通りになったことが嬉しいです。安全運転を基本に、ここぞで勝負に出る、その切り替えがうまく行ったことが勝因かな。今後は、技術面よりも精神面をもっと安定させなければならないと思っています。麻雀が好きで、二十代から遊んできましたが、賭け麻雀は心身の健康によくないので、ここ十年ほどはやめていました。しかし、ここで健康麻雀に通うようになってから、知力・体力・精神力といった総合的な人間力が問われる麻雀本来の面白さを一層感じるようになり、とても良かったと感謝しています。これか

←優勝の桐本皇三雄さん(前列中)、準優勝の徳丸寿子さん(同右)、3位の西本昌孝さん(同左)と、祝福する港区麻雀業組合・竹馬進会長(後列左)、マージャンひろ・中島弘店主(同右)

らも、勝敗には適度に(笑)こだわりながら、楽しく続けていきたいと思っています」と話していました。

競技全体を通じて、麻雀には付き物とされる飲酒も喫煙もなく、競技前には挨拶し合うなど、知的スポーツである麻雀本来の健康的な雰囲気が印象的でした。

ライブ情報

●八幡屋出身ロックドラマー桐田勝治さん　日本のビジュアル系ハードロックバンドのトップを走り続ける人気バンドに所属。「周りを元気づける灯台のようなミュージシャンに」と演奏に磨き。港中学校出身。八幡屋の理髪店「きりた」は実家▽所属バンド「ガーゴイル」の十五枚目のアルバム『奇獣』(「愚鈍」「命の傷」「夢果実」など十一曲)好評。三一五〇円。☎〇三-三三八一-九一八〇ファーストセル▽十一月七日(土)十八時半から大阪・阿倍野ROCKTOWNで開催の「ガーゴイル」ワンマンライブ『フユゴイル～snake final～』に出演予定。前売四千円、当日四千五百円。☎六六三一-六九〇〇ROCKTOWN。

↑桐田勝治さん㊨とペドロさん㊧

●三先のフォーク歌手ペドロさん　切断ブラザーズ(左手親指切断の共通体験を持つ三人＝ペドロ、ボン、チャン＝で二〇〇六年に結成)のリーダーやソロで温かな雰囲気のオリジナルフォークソング▽毎月第一・三木曜各二十時からザ・セラー(中央区西心斎橋一-一七-一三新スミヤビル地下、☎六二一二-六四三七)で開催のフォークライブにレギュラー出演▽毎月第三火曜二十時からかつおの遊び場(中央区宗右衛門町四-五宗右衛門町センタービル二階、☎〇九〇-五八八二-七〇一五)で開催のフォークライブに切断ブラザーズとしてレギュラー出演▽毎月第二火曜二十時半からロージー(中央区西心斎橋一-九-五日宝三ツ寺会館地下一階、☎六二一三-三九九九)で開催のノンジャンルライブにレギュラー出演。

●市岡元町在住の音楽ユニット「花☆キャラ」　ポップスから沖縄民謡まで生活に根ざした明るく前向きで分かりやすいオリジナルソング▽CD『マルゲリータとトマトパスタ』『あなたらしくあたらしく』好評▽http://www9.ocn.ne.jp/~hana2383

音楽

閉塞感破るエナジー

ロック演奏会で桐田さん迫力のドラム

→壮絶な盛り上りを見せたザ・クロマニヨンズのコンサート（10月21日夜、北区）＝ザ・クロマニヨンズ提供のイメージ写真から

八幡屋出身の人気ロックドラマー桐田勝治（きりたかつじ）さんが所属するバンド「ザ・クロマニヨンズ」の演奏会「イエティ対クロマニヨン」が十月一十一日に北区のフェスティバルホールで開かれ、大変な盛況でした。

♪鼓膜と心臓叩く大音量

午後七時、「みんなの内に燃えているロックンロール魂を呼び覚まそう！」「全てのシーンを心のフィルムに焼きつけよう！」とのバンドからの呼びかけに「ウォー」と腕を突き上げ、総立ちで応える聴衆。そのままの形で演奏が始まりました。

めまぐるしく転換する背景や照明の演出の中、鼓膜をビリビリと震わし、心臓をバンバンと直接叩かれるような大音量で、「突撃ロック」「黄金時代」「人間マッハ」「涙の俺1号」「チェリー」とラバーソール」「団地の子供」「ホッテンダー」「日本の夏ロックンロール」「ヘッドバンガー」「南から来たジョニー」「燃え上がる情熱」「突然バーン」「ギリギリガガンガン」「紙飛行機」「クジラ」「夢の島」「ナンバーワン」などが次々と演奏されました。

♪激しいパフォーマンスと発声

体の肉が四方八方に飛びちぎれるかと思われるような激しいパフォーマンスと怒鳴るような発声で演奏を引っ張るメーンボーカリスト（甲本ヒロト（こうもと）さん）。これを両サイドのギター（真島昌利（ましまさとし）さん）とベース（小林勝（まさる）さん）が迫力とハイテクニックの演奏でサポート。さらにリズム感とパンチ力溢れる桐田さんのドラミングが背後から演奏全体をパワーアップ。客席の一人ひとりの五臓六腑（ごぞうろっぷ）にバンドの〝ロックンロール魂〟が叩き込まれるかのように感じられました。

♪舞台と聴衆が一体に

聴衆は上着を脱ぎ捨て、ほとんどがTシャツ姿。立ったままリズムに合わせて小刻みに跳び上がり、腕を突き挙げ、「カッジー」「ヒロトー」「マーシー」「コビー」などの声援でステージに呼応。三階席まである巨大なホールは、床（ゆか）が抜けるかと思われるほど終始ズンズンと揺れ続け、熱気でむせ返っていました。

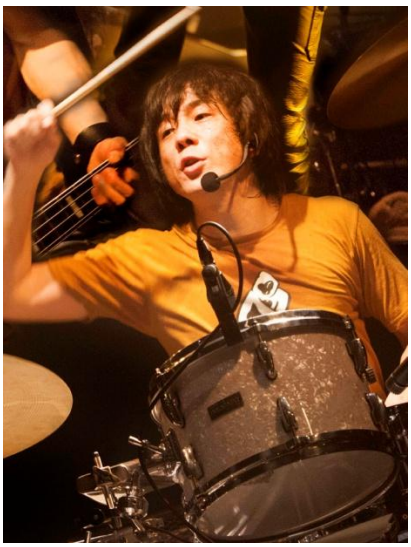
終盤には演奏者全員が上半身裸に。アンコールも含めてほぼ二時間ぶっ続けの演奏は、最後

にメンバーが声を揃え、「楽しかった！」「また絶対やるぞ！」「ありがとう！」と会場に手を振ることで、ようやく終息を迎えました。

♪音楽に対する幅の広さも

全体として、舞台と聴衆の一体感、年齢を感じさせぬ演奏者の壮絶なパフォーマンス、現代社会の閉塞感を突き破るような物凄いエナジー（力）が印象的でした。

その一方で、激しい曲の合間に「団地の子供」「南から来たジョニー」など静かに味わえる曲やカントリー風の爽やかな曲も挟まれていたこと、またトークの途中、ヒロトさんが黒人霊歌から「アメイジング・グレイス」の見事なハーモニカ演奏で聴衆を静まり返らせたことなどから、音楽に対するザ・クロマニヨンズの思いの深さ、幅の広さも感じられました。



↑パンチ力のあるドラム演奏でコンサートを支えた桐田勝治さん＝ザ・クロマニヨンズ提供

♪「ドラムのリズム感にまらない」

会場には桐田さんの両親を含む港区民をはじめ、近畿一円からと思われる来場者が集い、二千七百もの席をほぼ埋め尽くしていましたが、そのうち中央区から来た三十一歳の女性は「ずっと前からのロックファンで、特にどのバンドの誰のファンということはありませんが、クロマニヨンズは大好き。京阪神で演奏会があれば、必ずチケットを手に入れます。昨日も同じコンサートを京都で聴きました。低音の響き、特にドラムの力強いリズムがたまらなく好きです」。

♪「年齢と日常忘れ集中できる」

また、その母親で京都府宇治市から来た六十歳の女性は「娘に誘われて、ロックコンサートにはもう何十回と来ています。若者と一緒に跳び上がれるのが嬉しく、年齢を忘れ、日常を忘れて集中できるのが一番の快感。コンサートに向けて体調を整えようと意識するので、生活にリズムとメリハリが生まれます」と話していました。

♪「ガーゴイル」でも活動

桐田勝治さんは一九七一年港区生まれ。生家は八幡屋一丁目の「理容きりた」。八幡屋小、港中、泉尾高卒。十七歳から日本のビジュアル系ロックバンドの先駆けであるガーゴイルで活動。〇六年、ザ・クロマニヨンズに加入。「音楽も人生もアンサンブル」を信条に、「灯台のように周りを明るく照らすミュージシャン」を目指して演奏にますます磨きをかけています。

【31頁に桐田勝治さんのライブ出演予定】

住まいの防犯レベル高めよう
①ワンドア・ツーロックは常識
②ピッキングに強いカギに交換
③窓にも補助錠の取り付けを
PHS・携帯OK 0120-70-5569
(アーイアート)港カギ防犯センター
安全・安心をご提供します

港区港晴1-4-8
(港晴小学校並び)
☆大阪府錠前技術者防犯協力会会員
☆港防犯協会会員　☆防犯設備士第00-6738号

音楽

映画会盛り上げた！

山口ももえさん アコで歌声で

→映画会を盛り上げた山口ももえさんの演奏（写真は10月18日、千日前のトリイホールで『近松物語』上映前の「お富さん」弾き語り）

八幡屋在住の不思議ミュージシャン・山口ももえさんが十月中旬、「大阪ミナミ映画祭」の各映画上映の前にアコーデオン演奏や歌声を披露し、イベントを盛り上げました。

♪『大阪の宿』『浪花悲歌』など上映

同映画祭は、現在の「なんばマルイ」辺りにあった南地演舞場で一八九九年に日本で初めて興行として映画が上映されたことを顕彰するため、二〇〇五年から毎年開催されています。

今年は十月十五～十九日の五日間、道頓堀・千日前・日本橋の三館を会場に『大阪の宿』（一九五四年、五所平之助監督）『浪華悲歌』（一九三六年、溝口健二監督）『残菊物語』（一九五六年、島耕二監督）『近松物語』（一九五四年、溝口健二監督）『あした天気になあれ』（二〇一三年、港健二郎監督）『関取千両幟』（一九三〇年、後藤岱山監督）の六作品をほぼ一回ずつ上映。連日多くの映画ファンで賑わいました。

♪懐かしい曲ばかり演奏

この中で山口さんは各上映前の三十分間、『悲しき口笛』『青い山脈』など年配者には懐かしい曲ばかりを情感豊かにアコーデオンで演奏。十八日の『近松物語』上映直前には「この映画が作られた年にヒットした歌です」と前置きして春日八郎の『お富さん』を弾き語り。陽気なメロディとリズムが会場の唱和と手拍子を誘いました。上映後の観客アンケートには「懐メロ演奏ですんなり映画に入り込めた」など、この趣向や演奏そのものを賞賛する記述が見られました。

←巧みなアコーデオン演奏を披露する山口ももえさん。上は『悲しき口笛』、下は『お富さん』

♪フリーミュージシャンとして

山口さんはフリーミュージシャンとして、独特のハスキーボイスとギター・アコーデオン伴奏で、郷愁誘う温かな創作曲や懐かしい童謡・唱歌・昭和歌謡などを各種イベントで披露。女性デュオ「雛弁子」としても活動。ミナミでは路上ライブを数年間続けています。

美術

迫力風景画に感嘆

川島恵美子さん作品展にぎわう

→作品について語り合う川島恵美子さん（右向こう側）や来場者＝10月27日、みなと通の画廊＆アトリエ「ガレリア・リバリア」で

平和の願いをキャンバスに込め、リアリズム（写実主義）を貫いて絵画人生を送ってきた八幡屋在住の画家・川島恵美子さん（八三）が、みなと通の画廊＆アトリエ「ガレリア・リバリア」で十月十三日～二十七日、五十一回目となる作品展を開きました。

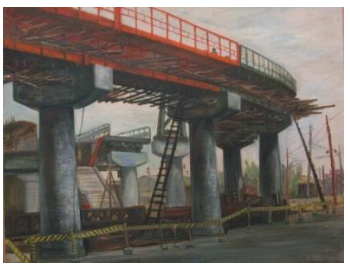
◆写実主義に圧倒された

一階ギャラリーには「ニルギリ南峰」（二〇一三年、ネパール）＝写真下㊤＝など油彩風景画の大作十一点、それに「ひがん桜」など水彩風景画の小品六点など、旧・新作合わせて十八点を展示。一階アトリエには実母を描いた「母の像」（六八年、木炭デッサン）や「安曇野」など油彩風景画六点が展示されていました。

最終日の十月二十七日には秋晴れの下を多くの人々が鑑賞に訪れ、「女性でご高齢なのに大作が多く、驚いた」「間近に見る写実主義の迫力、遠近感、臨場感に圧倒された」「どの絵にも物語を感じる」などの感想が語られていました。

◆慌ただしかった朝潮橋駅工事の頃

川島さんは来場者の質問に答える形で展示作品を説明していましたが、「朝潮橋駅工事現場」



←「ニルギリ南峰」（2013年、油彩）㊤と「朝潮橋駅工事現場」（1961年、油彩）㊦

＝写真右㊦＝については「昭和三十六年四月に描き、五月の第一回展に出品した思い出の作品です。この年の九月に第二室戸台風が来て、それまでのほとんどの作品が水に浸かりましたが、これは助かりました。翌年一月には長男を出産したのですが、当時は高度成長期で港区も朝潮橋駅などの建設が続いていたこともあり、本当に慌ただしい一年だったのを覚えています」。

◆佐田岬の棚田に見た農民の営み

また大作「岬の小さな村」＝写真次頁＝については、「昭和五十九～六十年に愛媛県佐田岬を訪れて一連の油彩画を残しましたが、そこの棚田は美しさもさることながら、その裏には日

←「岬の小さな村」（1985年、油彩）

本農民の不断の営みが感じられ、『これはいい加減な気持ちでは描けない』という思いに突き上げられたものでした。例えば、田は年々下がり続け、やがて一番下は海へ落ちそうになるので、その石や土を一番上まで運び上げて築き直します。そんな作業を営々と繰り返しながら米作りを続けているということでした」。

◆風情あった川内市の木造建物

←「老人ホームのある丘」（1971年、油彩）

また「老人ホームのある丘」＝写真右＝については「昭和四十六年に鹿児島県川内市を訪れた時の作品です。この建物は小学生の合宿などに使われていたのですが、木造でとても風情があり、部屋の間取りや、そこで使われていたシーツの造りも覚えています。数年後に再訪問した時には老人ホームになっていましたが、ぜひこの雰囲気を残しておきたいと描きました」。

◆平和願い、最後の一点目指して

そしてそれらの話をまとめるかのように川島さんは、「描く時にはそこに暮らす人々を思い、祈りながら筆を動かしています。多くのお力添えで好きな絵を続けられたことに感謝しつつ、これからも写実主義を貫き、平和を願い、画家として最後の一点めざして努力を続けたいと思っています」と話していました。

川島愚美子さん略歴　一九三〇年兵庫県生まれ。四八年に長谷川常弘氏から油絵の手解き。以後、大泉米吉、吉田利次、山本八三（銅版画）の各氏に師事。関西美術家平和会議、リアリズム美術家集団（のち集団造形）、日本美術会に入会。家事・子育てをこなし社会運動にも関わりながら写実主義を追求。平和美術展、日本アンデパンダン展などに出品。個展は八一年に第一回、六四年から毎年開催。六六年から海外スケッチ。〇五、一二年に画集。一一年に画廊開設。

ガレリア・リバリア　川島愚美子さんが①絵画人生の集大成②今後の活動の拠点③地域への感謝の表現④次世代への橋渡しの場―として二〇一一年十一月オープン。「リバリア」はスペイン語で「川」を意味。一階は常設展、二階はアトリエ。月～金曜十一～十八時開館。入場無料。三先一-一三-一八（みなと通沿い、地下鉄朝潮橋駅すぐ）、☎七五〇一-四一八八。

美術

心いやす灯り 一堂に

南市岡「風庵」で好評展示中

→「一味違う燭台とランプをぜひ楽しんで下さいね」と呼びかける繁栄商店街の「ぎゃらりー&かふぇ 風庵」のオーナー・藤井繁美さん

「素敵な灯りの下で秋の長夜を愉しみます」。鍛冶師による一味違う燭台とランプの展覧会が繁栄商店街(南市岡)の「ぎゃらりー&かふぇ 風庵」で催され、購入予約が相次ぐなど好評を博しています。十一月三十日(土)まで。

●鍛冶師の父子が「火」をテーマに

出品したのは石川県小松市の鍛冶師、河上知明さん・真琴さん父子。このうち知明さんは一九五六年生まれ。七九年に鍛冶の世界に入り、八六年に独立してアトリエを設立。「火」をテーマに燭台を制作し続け、全国で個展を催すと共に、チベット曼陀羅や絵画とのジョイント、さらには音楽・ダンス・演劇での灯りの演出も手がけてきました。一方の真琴さんは一九八九年生まれ。金沢美術工芸大学を卒業後、「手仕事を生かせる場」を求めて知明さんに師事。「気の利いた執事のように、適度に存在感をわきまえたシンプルな造形」を目指して制作を続けています。

●鉄の感触と優しい造形

会場では「バタフライ」「夜歩き灯台」「双葉」「ぜんまい」「くじら」「カメレオン」「灯唐草」などと名付けられた作品の数々が来場者の目を楽しませ、「鉄のひんやりした手ざわりがいいね」「優しく語りかけるような造形に心が癒されるね」などの感想が語られると共に、気に入った作品には「素敵な灯りの下で秋の長夜を愉しみたい」などと購入予約が相次いでいます。

←「鉄のひんやりした手ざわりがいいね」「優しく語りかけるような造形に心が癒されるね」と好評を博している燭台・ランプの数々

●絵画やレトロ品も常設

「風庵」では他に、藤井繁美オーナー所有の芸術作品や、明治・大正・昭和期のレトロ感あふれる陶器・ガラス器・柱時計・レコード盤・ミシンなども常設展示。珈琲はお菓子付きで三百円。開場は十~十八時、日曜定休。南市岡三-一一-一〇。☎四九六五-五九八一。

歴史

平和のため 戦争体験 語り継ごう

今月の語り部

猪伏昌三（いぶししょうぞう）さん（元田中住民）⑦

前ぶれ　昭和四（一九二九）年、北朝鮮の元山（ウォンサン）に生まれた私は、中国大陸での戦火を背景に、満州（中国東北部）東部の町・図們（トゥーメン）、次いで延吉（イエンチー）で育った。対米英戦が始まり、戦争一色の中学校生活を送った。昭和二十年八月、突如のソ連参戦に緊張が走る中で敗戦。日本人街は廃墟と化し、避難生活は悲惨を極めた。生きていくため行商など何でもやった。その中で遭遇した満蒙（まんもう）開拓青少年義勇軍の悲劇は同世代として胸張り裂ける思いだった。厳寒の候、発疹（はっしん）チフスで父を失った私は、豆腐売り、工員、風呂屋の三助と仕事を継ぎながら家族を支えた。昭和二十一年三月、母と共に、父の遺体がある日本人墓地へ向かった―。（本文は回想録『平和の空よ 永遠に』から本紙が抜粋・再構成）

日本人墓地の凄惨

人民裁判や女性の哀れも見た

母と一緒に家を出て公園橋を渡り、六〇四部隊（延吉にあった日本陸軍の部隊）の南側を西へ進み、なだらかな坂道を登っていくと、裸の遺体が目につくようになりました。進むほどにその数は増えてきます。

◆義勇軍の遺体は食い散らかされ

それは満蒙開拓青少年義勇軍（九月号で既述）の隊員たちの亡骸（なきがら）でした。前年の十一月ごろから延吉刑務所（彼らの宿泊施設となっていた）で亡くなったのを連日この山へ運び込んだのでしょう。橇（そり）に載せ、やっとのことで辿り着いたものの、食事もろくにとっていない彼らはそれだけで精一杯で、遺体を積み重ねるなど体力的には無理だったと思われます。

春でもなお凍結したままのそれらの遺体は、マネキンか蝋（ろう）人形の如く真っ白でした。栄養失調で死んでいく時は目をつぶる力もないようで、ほとんどの死体は目を開き、歯を食いしばり、あるいは虚空（こくう）をつかむような姿。手にした雑嚢（ざつのう）

←母と一緒に父の遺体のある日本人墓地へ向かう途中に通った公園橋（上）や陸軍の建物（下）（どちらも戦後に撮影＝『夏草の賦』から）

を取られまいとしてか、それも力尽きてか、息を引き取る間際の想いはそれこそ様々であったろうと思われます。その遺体を野良犬やカラスが好き放題に食い散らかしていました。皮膚が裂けて朱肉のように真っ赤な肉が柘榴のように食み出したり、食いちぎられた手や腸が離れた場所に散らかっていたりしました。遠くにいた狼らしき動物がこちらに気づいて走り去るのが見えました。犬やカラスにとっては格好の餌場であり、人気のない時は彼らの独壇場であったに違いありません。

◆自立った子供たちの遺体

遺体は仕分けてあり、一般邦人の遺体は義勇隊員の奥の方に雑然と置かれてありました。それぞれが何らかの物で覆われていましたが、子供が目立ちました。本箱の引き出しや柳行李の蓋に納められた遺体、物入れに二つ並べられた遺体、湯上がりタオルやカーテンだけで包まれた小さな遺体…。親に先立った子はそれなりに葬られたと思いますが、親に先立たれた子の最期はどんなものだったのでしょう。

◆父の遺体はコモに巻かれて

そんな中で父の遺体は、北側がやや高く、枯れ草の上に雪が溜まったなだらかな丘陵に、コモに巻かれ、北を枕にして横たわっていました。同郷の徳島県人たちの真心のこもった気配りが感じられてなりませんでした。が、大地は凍てついたままで、掘って埋めるなどとても出来るものではありませんでした。きちんと埋葬するために「雪どけを待ってもう一度出向いてこよう」と母と申し合わせ、遺体の頭髪と爪を切り、線香を手向けて帰路に就きました。

◆ソ連軍が引き揚げた

さて、四月に入って、「ソ連軍が引き揚げる」というニュースが流れてきました。当時、延吉橋を北へ渡るとロータリーがあって、その北側にソ連の指揮所がありました。正規兵の将校が出入りしており、女性の軍人もいました。スカートをはき、胸の膨らみは服がはちきれんばかり、すらりとした脚には皮の長靴を履いていました。服装が立派な上に身のこなしも軽やかで、日本軍には見られない光景だと感心したものでした。そのソ連兵らが四月十五日、うわさ通り、一斉に引き揚げたのです。

◆墓標の下に1万人

だが、気になることが残っていました。それは、多くの日本兵がソ連軍の捕虜収容所で亡くなりましたが、その後どうなったか、ということでした。それを見定めるため、私はその収容所へ向かいました。

その建物はソ連軍に代わって中国の八路軍（共産軍）が支配していて、捕虜の大半は既にシベリヤへ連行されて病人だけが残り、いたって閑静でした。そして、収容所の少し東側のなだらかな丘に、赤煉瓦が一メートルほどの高さで正方形に積まれているのが見えました。一辺が五～六メートルはあったと思います。その上にもう一段、一回り小さな正方形に煉瓦が積まれ、その中心に白木の墓標が立てられていました。それには何と書かれていたか、記憶はさだかではありませんが（古谷友一氏の著『夏草の賦』によれば「嗚呼悲壮　忍辱　日本人之墓」であったとされています）、この下に一万人ともいわれる（その後の調査で正確には六八七六人とされている）日本軍捕虜が、発疹チフスや栄養失調などのいわゆる〝敗戦病〟にやられ、無念と望郷の

←敗戦後に日本兵がソ連軍の捕虜となって収容されていた「延吉捕虜収容所」の跡地（現在は教会㊤や中国軍の施設㊦になっている）

想いを胸に抱えたまま眠っていたのです。

当時の私にはその数までは知ることができませんでしたが、収容所で亡くなった日本兵捕虜の墓所であることは察せられ、敗戦後もなお続いた悲劇に、十六の胸は張り裂けんばかりでした。そして、そんな事実も戦後、国民の間からだんだんに忘れ去られていることが残念でなりません（この件については藤原雅英氏の著『果てしなき山河に　終焉と黎明の鮮中ソ国境を行く』に詳しいので、関心ある読者は読まれることをお勧めします）。

◆親日的だった中国人が銃殺刑

やがて四月も下旬になり、「西広場で人民裁判がある」との情報が流れました。働いていた風呂屋から近いので、当日、仕事を済ませて見に行くと、広場の中央に木製の台が作られ、その上に数人がのぼっていました。これから裁判が始まるところでした。

やがて罪人が、白い紙で作った細長い帽子をかぶらされ、肩からは紙の服を着せられて台上へ連行されてきました。よく見ると、同じ大家の屋敷にいた孫参事官です。息子は私と同じ間島中学の四期生。家族はみな良い人で、日本人に対する付き合いも広く、評判も良かったのです。その親日的な行動が、敗戦と共に逆に問題となり、裁判にかけられたのでした。

紙の服には大きな文字で「売国奴」や「犬」などと書かれ、官吏からは罵声が浴びせられ、初めから罪人扱いでした。罪状も一方的に発表され、取り巻く人たちはわいわいと大声を上げながら追い込んでいきます。私は中国語を解せませんでしたが、おおよその内容は理解できました。罪状の認否が終わると、市中引き回しが始まりました。幟を掲げたり、大声で喚いたり、先頭の孫氏を取り囲みながらぞろぞろと二百人ほどが続きました。やがて行列は公園橋を渡りましたが、そのあと公園の中で銃殺刑が行なわれたと聞きました。

その後、孫さん家族の消息を聞くことはなく、後輩の孫君がどうなったかについても耳にすることはありませんでした。

◆ブリキ屋に転職

気候がさらに温かくなった頃、風呂屋の向かいの中国人が経営するブリキ屋に転職することになりました。主人は日本語が上手でした。仕事は独特の手作業で、洗面器や薬缶などブリキ製品全般を製作し、穴の開いたアルミ鍋などの修理も手がけていました。

私の仕事は、亜鉛鍍金を施した屋根用の波トタンを延ばし、それが何枚もたまると、今度は原寸の型紙に沿って線を引き、ハサミで切っていくというものでした。コツが必要でしたが、慣れないため、朝から夕方まで続けていると握力が鈍り、おまけに薬指と中指に力がかかって水ぶくれができ、それが破れて、何日目かにとうとう作業できなくなってしまいました。「早く

治して主人に負担をかけないようにしなければ」と焦っていたところ、幸い、近所に元軍医だという日本人男性がいて、治療を受けることができました。化膿しかけた傷口を消毒し、リバノールという黄色い消毒ガーゼをあてがい、包帯をしてもらって、何とか仕事に戻ることができました。因みにこの傷は、この年八月十六日に引き揚げるまで治らず、首から紐で右手を吊った姿で日本へ帰ることとなったのです。

◆若い女性の哀れ

四月の終わり頃、知り合いの紹介で二人の娘さんを我が家に同居させることになりました。「本田」「鈴木」と名乗り、両人とも長野県の出身で、二十歳に満たない独身でした。訊くと、揮春で電話の交換手をしていたが、ソ連軍の進攻で職場を棄てざるを得ず、流浪の旅が始まったといいます。延吉に着くまではかなり危険な生活を強いられたに違いありませんでした。

彼女らはこの時代、生きていくためにはそうするしかなかったのでしょう、昼前に家を出て夕方帰ってくる生活を始めました。帰宅すると冷え切ったオンドルに身体の一部を密着させていましたが、それは「妊娠しないため」ということでした。私もまだ若年ながら、過酷な状況下で避けることのできない女性の哀れを嫌でも胸に焼き付けられたものでした。

◆引き揚げの観測

そんな哀しい出来事も挟みながら、やがてフルハト河の氷は溶け、春から夏へと大陸の気候は急速に変化していきました。その一方で、終戦直後から続いていた八路軍（中国共産党軍）と国民政府軍（蒋介石軍）による中国の内戦は熾烈を極め、既に吉林市を支配下に収めた国民政府軍は延吉市へ近づきつつありました。

ちょうどそんな頃、たしか六月あたりから、アメリカの仲裁で日本人の引き揚げ問題が進展していったようで、七月になると巷では「いよいよ日本へ帰れるのではないか」との観測がささやかれ始めました。「お金もないまま帰ってどうなるのか」と不安を口にする人もいましたが、それでも、「夢にまで見た故国の土を踏める」という希望に誰もが日々胸を膨らませていきました。

（つづく）

ひとくちPR

（1行＝税込1000円）

●ボクササイズでシェイプアップ！ 女性も小・中・高生も楽しく練習。親切指導。家族的雰囲気。月会費五千円（無期限十枚つづりチケット五千円）。入会金一万円を只今半額。練習日は月・水・金の十九時半～二十一時半。港ボクシングジムは三先一-一三-九（地下鉄朝潮橋駅南側の歩道橋すぐの裏通り）。http://amebio.jp/minatogym/

●介護ベッド無料で譲ります 要分解・引き取り。希望者は☎六五七一-四六三六港新聞へ。

読者プレゼント

※いずれもハガキに今月号の感想とプレゼント名を書いて20日必着で港新聞へ。

●交通科学博物館（ミニ文化案内）招待券をペア2組に。

●関西フィル「第九」特別演奏会（ミニ文化案内）招待券をペア1組に。

●弁天シネマ倶楽部『心の旅路』（ミニ文化案内）招待券をペア2組に。

ミニ文化案内

●交通科学博物館さよなら企画展Ｐａｒｔ１「収蔵品コレクション曝涼展」

「曝涼」とは、虫干しを兼ねて物品を点検すると共に、蔵の中身を公開すること。一九六一（昭和三十七）年の開館以来、収集・保存してきた多種多様な収蔵資料を、初展示も多く交えて約二〇〇種・四二〇点を紹介。主な展示資料は、「壱の蔵」（鉄道運行を支えた名品たち）では駅名標「湊町」（初）、新幹線方向幕（初）、電柱番号票（初）、乗車券輸送箱、昭和三十八年北陸線臨時輸送ダイヤ（初）、硬券切符作成に使用されていた乗車券裁断機など、「弐の蔵」（後世に残したいこうはく交通資料）では「きのくに線」愛称決定ポスター（初）、京都停車場改良工事紀要図譜（初）、最新京都名勝（初）など。十二月十五日まで開催中▽他に**「蔵出しヘッドマーク展」**（時代の節目や記念行事の際に列車の先頭に取り付けられるメモリアルなヘッドマークを収蔵品から約二十点展示。十一月二十四日まで開催中）**「関西大学鉄道研究会写真展『よみがえる あの時代』」**（阪和線・福知山線・大阪市電などの過去と現在を比較した約十点。十二月二十三日まで開催中）**「ミニ５００系新幹線運転会」**（十一月二十三日㊏、二十四日㊐の十時半～十二時と十三～十六時に屋外展示場で）**「パノラマ運転」**（平日三回、土日祝日五回）などの催しも▽十～十七時入館、月曜休館（祝日なら開館し翌火曜休、火曜も祝日なら振替休なし）。高校生以上四百円、四歳～中学生百円。ＪＲ弁天町駅すぐ。☎六五八一・五七七一。

↑「曝涼展」の会場風景①と、「よみがえる あの時代」の展示写真から「阪和電鉄―？」㊦

●港図書館

①図書展示「ようこそ書物の森へ」展＝十二月二十七日（金）まで開催中。大阪市立図書館司書一〇一人が「書物の森」というテーマに沿って選んだ、お薦めの本を展示②冬の子ども会＝十二月十四日（土）十時半～十一時半に港区民センター二階会議室「橘」で。パネルシアターや大型絵本の読み聞かせ。申込不要。当日先着四十人③あかちゃんのおたのしみ会＝毎月第一金曜日（十二月は六日）の十一時～十一時半、じゅうたんコーナーで。赤ちゃんと保護者を対象に、赤ちゃんが絵本に親しめるよう工夫。申込不要④おたのしみ会＝毎週水曜十五時半～十六時、じゅうたんコーナーで。幼児を対象に、絵本の読み聞かせや紙芝居、パネルシアター、手遊びなど。申込不要▽いずれも問い合わせは☎六五七六・一三四六港図書館へ。

●関西フィルハーモニー管弦楽団「第九」特別演奏会

「夢と希望の架け橋…飯森範親の『第九』」と題して贈る年末恒例の演奏会。「最も大切なのは、この曲の〝ことば〟から発せられる精神、魂なのではないか」と語る飯森さんが、渾身のタクトで歓喜の時空間を創出する。指揮：飯森範親さん。ソプラノ：安藤赴美子さん、アルト：福原寿美枝さん、テノール：松原友さん、バリトン：大沼徹さん。合唱：田辺第九合唱団。演奏曲目は①モーツァルト：交響曲第９番 ハ長

←関西フィルハーモニー管弦楽団「第九」特別演奏会の指揮者・飯森範親さん（©ZENT）

調K・73②ベートーヴェン：交響曲第9番 二短調作品125「合唱付」。十二月十四日（土）十七時からザ・シンフォニーホール（JR環状線「福島駅」から北へ歩約七分）で。十六時四十分から指揮者プレトーク。S席六千円、A席五千円、B席四千円、学生席千円（全席指定・消費税込）。☎六五七七・一三八一。

●関西フィルとともに歩む会「2本のフルートによるコンサート」　同会が贈る毎秋恒例の演奏会。秋の深まりを二本のフルートで。ビゼー：オペラ「カルメン」より間奏曲、バッハ：無伴奏チェロ組曲第一番より「プレリュード」、ドップラー：ハンガリー田園幻想曲、フルート二重奏でドップラー：アンダンテとロンド、ケーラー：花のワルツ、日本の曲から「りんご追分」「ハナミズキ」ほか。十一月十七日（日）十六時から港ルーテル教会（磯路一・二・一八）で。参加協力費千五百円（中学生以下八百円）。定員五十名。要事前予約。TEL・FAX六五七四・七七五六 足立（あだち）。

●弁天町市民学習センター「クリスマスコンサート2013」　毎年好評の関西フィルメンバーによる弦楽五重奏コンサート。今年は「懐かしのスクリーン・ミュージック」をテーマに、映画の中で使われたクラシックの名曲や名匠デービッド・ハウエル編曲による映画音楽名曲特選。十二月十九日（木）十五時半と十九時の二回、オークホール（オーク200・二番街六階）で。入場料千五百円（小中学生八百円）。定員各回一百五十名。小学生以上が対象。申込方法など詳細は同センター（☎六五七七・一四三〇）へ。

●弁天町市民学習センター・弁天シネマ倶楽部（くらぶ）『心の旅路』　「心に残る名作映画を低料金で多くの市民に」と同センターが企画した上映会の三十一回目。―第一次大戦中のイギリス。戦

←弁天シネマ倶楽部『心の旅路』の映像から（上下とも右が〝スミス〟、左がポーラ）

争で記憶をなくした軍人〝スミス〟は入院先を抜け出し、旅回りのダンサー、ポーラの助けで追っ手を振り切る。二人はやがて結婚。長男も授かり、慎（つつ）ましくも幸福な時間を過ごしていた。が、出会いから三年後。交通事故のショックで自分が実業家の息子であることを思い出した彼はポーラとの記憶を失ってしまう。それを知らないポーラは夫の帰りを待ち続けるが…。監督はマーヴィン・ルロイ。出演はロナルド・コールマン、グリア・ガースン他。一九四二年アメリカ映画。モノクロ、一二六分。十一月三十日（土）十時と十四時から講堂で。料金は一人一回六百円（前売五百円）。定員は各回先着百名。当日

十二時十分頃からロビーで無料ライブを予定▽詳細は同センター（☎六五七七・一四三〇）へ。

●弁天町市民学習センター「こどもOH！笑い塾～ふゆ♪～」受講・出演者募集　「夏休みこどもOH！笑い塾」（前号30頁）で大好評だった、子供たちによる子供たちのための喜劇トレーニング＆発表。大阪市出身の放送作家・砂川一成（かずしげ）さんが優しくリード、一緒に笑いながら、喜劇のコツを体感・体得。今回はお風呂屋さんが舞台。十二月一日（日）、十四日（土）、十五日（日）の十四～十六時と二十三日（月祝）十～十六時の全四回。費用は無料。対象は小学生以上。定員は先着二十人。申込締切十一月三十日（土）。詳細は同センター（☎六五七七・一四三〇）へ。

●ギャラリーはたなか　①旗谷吉員（はたたによしかず）油彩画展「物見遊山（ものみゆさん）仮想の名所絵」＝十一月二十二日（金）～十二月一日（日）②上月（こうづき）ひとみテンペラ画展「わたしの小さな祭壇」＝十二月十二日（木）～十二月二十一日（日）。いずれも水曜日は休館、開場は十一～十九時（最終日は十七時まで）。磯路一・一一・五（港区役所向かい）、☎六五七二・五九八七。

←上月ひとみテンペラ画展「わたしの小さな祭壇」への出展作品から「道祖神」

●シネ・ヌーヴォ「生誕百年記念 森繁久彌映画祭」　大阪出身の偉大なエンターテイナーにして、戦後日本を笑いと涙で鼓舞し、庶民を勇気づけた森繁久彌（もりしげひさや）の生誕百年を記念し、代表作三十五本を一挙上映。希代（きたい）の名優と名監督が織り成した感動の昭和映画史を辿る。上映作品は『恋人』『有頂天（うちょうてん）時代』『海賊船』『浮雲日記』『東京の恋人』『摩子（まこ）恐るべし』『東京ロマンス 重盛（しげもり）君上京す』『次郎長遊侠伝 秋葉（あきば）の火祭り』『わが名はペテン師』『へそくり社長』『はりきり社長』『駅前旅館』『男性飼育法』『飛びっちょ勘太郎』『珍品堂主人』『ふんどし医者』『地の涯（はて）に生きるもの』『社長道中記』『喜劇 駅前団地』『社長洋行記』『青べか物語』『台所太平記』『喜劇 駅前茶釜』『喜劇 駅前音頭』『沙羅（さら）の門』『喜劇 各駅停車』『大（だい）太平記』『喜劇 駅前大学』『喜劇 駅前百年』『喜劇 駅前桟橋（さんばし）』『喜劇 女は男のふるさとヨ』『事件』『連合艦隊』『暖簾（のれん）』（追悼・山崎豊子）『花のれん』（同）。上映期間は十一月十六日（土）～十二月十三日（金）、一月一日（木）～十七日（金）。上映時間など詳細は同館（地下鉄「九条駅」⑥出口歩三分、☎六五八一・一四一六）へ。

→北の海に生涯をかけた男の年代記『地の涯に生きるもの』㊤と、退職間近い一徹なSL機関士を描いた人情譚『喜劇 各駅停車』㊦